

武蔵と柳生新陰流

— 新陰流と武蔵流の「極意」を学ぶ

赤羽根龍夫*

赤羽根大介**

* 神奈川県立大学名誉教授、春風館道場関東支部長
** 柳生新陰流師範、新陰流・円明流稽古会主宰

目次

- 一、極意への道 2
- 二、『武家諸法度』 5
- 三、柳生の「敵に随う」 10
- 四、長岡房成の転論 13
- 五、柳生の「転」と武蔵の「嚴の身」 23
- 六、『刀法録』の中の武蔵 28
- 七、「直通」という極意の太刀 30
- 八、尾張円明流 34
- 九、武蔵の「勝人剣」 38
- 十、武蔵の石と水 39
- 十一、武蔵の「下からの切り上げ」 43
- 十二、新陰流の「廻し打ち」と自由稽古 45
- 十三、直刀と湾刀 48



神戸金七(明治27年～昭和55年)
名古屋春風館道場初代館長
柳生新陰流11世
尾張円明流15代継承者

- 十四、メコン河の新陰流
- 十五、嚴周伝新陰流の四原則
- 十六、対二刀勢法

一、極意への道

『五輪書』によると、宮本武蔵は十三歳で初めて新当流の有馬喜兵衛という武者に打ち勝ち、その後、二十八、九歳まで六十回余り真劍勝負をして一度も負けなかったが、二十九歳の時に巖流島で佐々木小次郎に勝った後、「兵法至極して（兵法の極意を得て）勝つにあらず」という苦い反省のもとに二度と真劍勝負をしなくなり、その後二十年の間、深き道理を求めて、「朝鍛夕鍊」、「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を鍊とする」劍の修行をし、自ずから兵法の道に会ったのは五十歳の頃であるという。その事情を『五輪書』に次のように書いている。

我、三十を超えて跡をおもいみるに、兵法至極して勝つにはあらず。自ずから道の器用ありて、天理をはなれざる故か。または他流の兵法、不足なる所にや。その後なおも深き道理を得んと朝鍛夕鍊してみれば、自ずから兵法の道にあうこと、我五十歳のころなり。

この場合の五十歳の頃出会った「兵法の道」は「兵法至極」つまり兵法の極意という意味であろう。それならば武蔵が手にした兵法の極意は、どのようなものであろうか。それは『五輪書』に書かれているはずである。しかし『五輪書』には「至極」という語はこゝ一箇所しか使われていない。「至極」と同じ意味を持った「極意」という語も、「風の巻」で他流批判をし、自分の兵法には「極意・秘伝」などというものはなく、ただ「兵法の道」の鍛錬があるのみであるとして、否定的意味で一度、使われているだけである。この場合の「道」は冒頭の極意を意味する「兵法の道」ではなく「鍛錬・修行の道」であろう。

兵法至極を求めて二十年の間、「朝鍛夕鍊」した武蔵の極意書ともいうべ

き『五輪書』の中に、「至極」、「極意」という語が一箇所しか出てこないことは不思議である。一方、『五輪書』と共に、日本最大の兵法書と並び称される柳生宗矩の『兵法家伝書』では、次に挙げるように「極意」や「至極」という用語はしばしば使われている。その全てを挙げてみよう。

習いをはなれて習いに違わず、何事もするわざ自由なり。．．．これが諸道の極意向上なり。習いを忘れ、心をすてきつて、一向に我も知らずしてかなう所が、道の至極なり。（三〇、三一頁）（岩波文庫版のページ数）
ここでは技が自由になることが極意である、と言っている。

道とは何たる事を云うぞと問えば、常の心を道と云うなりと答えられたり。実に至極の事なり。（五五頁）

ここでは常の心を至極と言っている。

心をよく一度おさめ得たる人は、身口意の三業を浄めず、塵の交わりて汚れず、終日動けども動かず、千波万波したがい動けども、底の月の動く事なきがごとくなり。これ仏法の至極せる人（沢庵和尚を指す）の境界なり。法の師の示しをうけてここに記す者なり。（六三頁）

宗矩の依頼で、禅の立場から見た兵法の極意書『不動智神妙録』を書いた沢庵は、波に映った月が動かないように、心が「動けども動かない」ことが極意であると言っている。

神妙劍（中墨・太刀のおさまるところ）至極の大事なり。（六九頁）



桜山家伝来「新免武蔵像」

宮本武蔵『五輪書』

「足の運びようのこと、つま先を少し浮かせて踵を強く踏むべし。足づかいは常に歩むがごとし」



柳生宗矩『兵法家伝書』

「歩みのこと、いつものごとくするすると歩むがよきなり」

振り下ろした太刀を握った左拳こぶしの力が臍の周りに納まることを意味する神妙剣が極意であると言う。

是極一刀の事

是極とは、これ至極なりという儀なり。一刀とは、刀にあらず。敵の機を見るを、一刀と秘するなり。大事の一刀とは、敵のはたらきを見るが、無上極意の一刀なり。(七五頁)

敵の働きを見るのが極意であるという。この箇所は後で問題とする。

是非ぜひを去りきつて、かえつて是非のうちにもまじわり居よ、是非のうちより至極の位にすすみのほれという儀なり。(一一三頁)

良い悪いの判断〔是非〕を越えるのが極意であると言う。

『兵法家伝書』は沢庵の教示によるところが多いと言われている。沢庵の『動智神妙録』では「一箇所に心をとどめない」ようにすることが仏法の極意であり、それは兵法にも通じるという。今度は沢庵の言葉に耳を傾けてみよう。

貴殿の兵法にて申し候はば、向こうより切る太刀を一目見て、そのままにそこにて合わんと思えば、向こうの太刀に、そのまま心が止まりて、手前の働きが抜け候て、向こうの人にきらられ候。これを止まると申し候。(二六頁)〔徳間書店〕(一線著者による。以下同じ)

我が太刀に心を置けば、我が太刀に心をとられ候。これ皆心のとまりて、手前抜け候になり申し候。……仏法には、この止まる心を迷いと申し候。(二八、二九頁)

そつとも止まらぬ心を不動智と申し候。(三〇頁)

『不動智神妙録』では「止めぬ」は五十回も使われ、仏法と同じように兵法においても「心を止めぬことが極意である」と繰り返し繰り返し述べている。

心とむなと思うばかりぞと云う下句〔西行の歌(家を出る人とし聞けば仮の宿に心止むなと思うばかりぞ)が引用されている〕の引合わせは、兵法の極意にあたり申し候。心をとどめぬが肝要にて候(四七頁)

見るとも聞くとも、「所に心を止めぬを、至極とする事にて候。(六九頁)

宗矩も沢庵の考えを受けて『兵法家伝書』でも「とどめぬ」を二十二箇所も使っている。

何事も心の一すじにとどまりたるを病とする也 (五一頁)

心を一太刀打ったところにとどめぬ様にすべし (七七頁)

心が一所にとどまりたらば、兵法は負くべき也 (一一〇頁)

こうして見ると、柳生宗矩が兵法の極意とする「心を一か所に止めぬ」という考え方は沢庵からきていることは確かである。しかし心を一所に止めないようにする心の修行だけでは、兵法の修行として十分ではないことも明らかである。沢庵自身が次のように言っている。

至極の位に至り候えば、手足身が覚え候いて、心は一切いらぬ位になる物にて候(三九頁)

兵法の至極に至って手足身が覚えれば、心は一切いらぬと言っている。それには心の修行だけでなく、「手足身」の訓練も不可欠である。

一方、『五輪書』には心の修行を問題とする部分はほとんどなく、武蔵の「朝鍛夕錬」の稽古は心の修行というより、剣の技の修行・鍛錬であったことは明らかである。それでは宗矩の兵法至極を求めての手足身の修行は、どのような修行であったのであろうか。宗矩は『兵法家伝書』の「是極一刀」で極意について体系的に論じている。

一、是極一刀の事

是極とは、これ至極なりという儀なり。一刀とは、刀にあらず。敵の機を見るを、一刀と秘するなり。大事の一刀とは、敵のはたらきを見るが、無上極意の一刀なり。敵の機を見るを一刀と心得、はたらきに随いて打つ太刀を、第二刀と心得べし。これを根本にして、様々につかうなり。

後で論じるように、この「敵の働きに随う」ということが、柳生新陰流の基本精神である。手足身の訓練も、その「随う」を巡っての方法なのである。すでに『兵法家伝書』が書かれる以前の元和九年(一六三三)に出された『兵法相心持の事』に「敵にしたがわず、わが心ばかりにて打つことを当流にはひが(僻)事とあいきわめ候事」「兵法わが使うにはあらず、敵につかわせて勝つ事肝要なり」「勝つところは敵にあり」という語がある。

さて「是極一刀の事」では「敵の働きのしたがって打つ太刀を第二刀として、それを根本にして、さまざまに使う」とあるが、兵法でさまざまに使うのは、勿論太刀である。太刀を使うのは、直接的には心ではなく身体である。手が太刀をさまざまに使う。その方法は「敵の働きの随って」ということである。心の修行をいくらしても、太刀が遣えなければ兵法は成り立たない。しかし『兵法家伝書』は、この後、身体を使つての修練ではなく、またしばらく」と

どまらぬ心」を論じる。敵の働きを見るのが極意であるというが、見ることで、心がそこに止まるのである。なぜ宗矩は柳生新陰流の極意を論じるのに、新陰流の鍛錬を通して得られる技の極意ではなく、心を問題とする沢庵の考え方を執拗に繰り返すのであろうか。そのことの解明には、家康の「元和偃武」(平和な時代になって武器を伏せて用いない)の精神の体现である「武家諸法度」の成立にまで遡らなければならない。

二、『武家諸法度』

家康は大坂夏の陣で豊臣氏が滅んだ年を元和元年(一六一五)と改元し、「元和偃武」を宣言する。同時に二代将軍秀忠の名前で「武家諸法度」を公布する。その後二百数十年続く幕藩体制の基礎となる法律で、以後、将軍の代が替わるごとに大名を江戸城に集めて読み上げる決まりとなった。

一文武弓馬の道、もっぱら相嗜むべきこと。

文を左にし武を右にするは、古の法なり。兼ね備えざるべからず。弓馬はこれ、武家の要枢なり。兵を号して凶器となす。やむを得ずしてこれを用う。治まりて乱を忘れず。なんぞ習練に励まざらんや。

第一条で文武弓馬の道もっぱら相嗜むべきことと、文武両道をうたい、武力はやむをえない時だけ用いるべきであるが、しかし平和な時も戦乱を忘れず習練をしなければならないと言っている。これこそまさに江戸時代の思想的基盤となった家康精神の真髓なのである。「治まりて乱を忘れず、なんぞ習練に励まざらんや」、しかし治にいて乱を忘れないことが主に求められるのは、将軍をはじめとする為政者である。家康は秀忠に向かって、

小野流は剣術なれども柳生流は兵法なり。大將軍たるものすべからく大

將軍の兵法を学ばれよ。

と論じ、また後に柳沢吉保は、

太神君(家康)の台命にも神(新)陰流の道理をもって天下を治めよ、と御条目にもこれあり。

と言っている。家康は先ず第一に新陰流に天下を治める道理—大將軍の兵法を求めた。

ただほとんどの武士は政治には関与しない。しかし武士が常に腰に帯びる刀に、「人を切る」以上の価値を持つたための理由がなければ、争いは止むことはしない。江戸時代以前は戦闘要員として敵を倒す、また何時殺されるかもしれない状況下で身を護る、また武者として身を立てるには試合して勝つという大きな目標があった。しかしそれらは家康によって天下が平定されて以降の「元和偃武」の精神には反している。それでは戦うという以外の目標が剣にはあるだろうか。また「治にいて乱を忘れぬ」ためといっても、いつ起こるかも分らぬ乱のために日々修練をすることは不可能である。実際、江戸時代は島原の乱以降は二百年間ほとんど戦闘はなかった。この点に関して家康は『三河物語』『君臣言行録』で、剣聖と言われた上泉信綱の高弟正田文五郎の剣を見た感想として次のように語っている。

文五は成程剣法の名手であるが、人によって剣法の学び方に差異あるべきことを知らぬようである。即ち天下の主たる者とか大名は、必ずしも自らの手で人を斬ることは殆どないもの。若し戦場で敵に出逢い危急の時その場を避ければ家人等が馳せ寄って敵を打つべきだ。さる故に将たる者は、相手がけの剣法というものはいらぬものである。また天下静穏となれば、剣法は己の修養のためにのみある。文五はこのようなことを未だ知らない。

家康自身がすでに天下が泰平の場合の剣を学ぶ目的は「治にいて乱を忘れぬための修練」だけでなく、「おのれの修養のため」と理由付けている。徳川家の御家流としての新陰流を「治にいて乱を忘れぬため」だけでなく、「おのれの修養のためのものとする」にはどうしたらいいか、それが家康が新陰流に求めた第二の課題である。

宗矩が『武家諸法度』に現れた以上の二つの家康精神を実現するための兵法書『兵法家伝書』を書くためには、『武家諸法度』公布から一七年の歳月を必要とした。この間、宗矩は兵法師範として家光を教えただけでなく、いろいろ政治の相談にも乗っている。後年、家光は「我れ天下統御の道は、宗矩に学びたり」と語っている。また幕府政治にも深く関わり『兵法家伝書』が書かれた寛永九年（一六三二）には大目付に任じられている。さらに寛永十三年（一六三六）には一万石の大名に上り詰めている。宗矩は剣だけでなく政治と深く関わっていく。そのことが『兵法家伝書』の成立に深く関わることとなる。その冒頭で宗矩は次のように書く。

古にいえる事あり、「兵は不祥の器なり。天道これを悪む。止むことを得ずしてこれを用いる、これ天道なり」と。このこと如何とならば、弓矢太刀、長刀、これを兵と云い、これを不吉不祥の器也といえり。そのゆえは、天道は物をいかす道なるに、かえつて殺す事をとるは、実に不祥の器也。しかれば、天道に違ふ所を即ち憎むと云えるなり。しかあれど、止むことを得ずして兵を用いて人を殺すを、又天道なりと云う。……一人の悪によりて万人苦しむ事あり。しかるに一人の悪を殺して万人をいかす。これら誠に、人を殺す刀は、人をいかすつるぎなるべきにや。（一九頁）〔岩波文庫〕

これはまさに『武家諸法度』の第一条後半の部分とほとんど同文である。ただ『兵法家伝書』は「やむを得ずしてこれを用う」を、「老子」またはそ

れに則った家康の天道思想（家康が天下を取ったのは天から与えられた使命である）で片付けずに、具体的に「一人の悪により万人苦しむ事あり。しかるに、一人の悪を殺して万人を活かす」と、正当に武器を用いる根拠を説明して、さらに「人を殺す刀は、人をいかすつるぎなるべきにや」と「殺人刀」を「活人剣」としている。さらに『兵法家伝書』の末尾は次のようになって

この巻上下を、殺人刀、活人剣と名付けたる心は、人を殺す刀、かえつて人を活かすつるぎなりとは、それ乱れたる世には、故なき者多く死するなり。乱れたる世を治めんために、殺人刀を用いて、すでに治まる時は、殺人刀即活人剣ならずや。ここを以て名付くる所なり。（岩波文庫本 一一九頁）

冒頭と巻末に同じ論理が繰り返されているように、『兵法家伝書』は「活人剣」がテーマであることは明らかである。それでは宗矩はどうして活人剣思想に思い至ったのであろうか。

前述したように『兵法家伝書』は沢庵和尚の理論的裏付けに多くを依っているとされている。事実、「殺人刀」の末尾に、兵法にも通じる仏法の極意である「とどまらぬ心」について述べた後、「これ仏法の至極せる人の境界なり。法の師の示しをうけてここに記すものなり」と記している。

「活人剣」思想は沢庵の『太阿記』の次の文章と思われる。

夫れ通達の人（達人）は、刀を用いて人を殺さず、刀を用いて人を活かす。殺すを要さば即ち殺し、活かすを要さば即ち活かす。殺殺三昧、活々三昧也。

刀を用いて人を殺さずとは、刀を使って人を殺しはしないのですけれど、誰でも達人の体得している道理を前にしては、自然に身も心もすくんでし

まあって、死人のようになってしまおうので、人を殺さねばならないことなどないのであります。

刀を用いて人を活かすとは、刀を使って人をあしらいつつながら、敵の動くにまかせて、それをながめるのも、思いのままにできるといふのです。

このような沢庵の教えに従って（利用して）「人をころす刀は、人をいかすつるぎなるべきにや」と「殺人刀」を「活人剣」とした後で、次に宗矩は「兵（武器）を用いるには法がある」として、兵法を「大なる兵法」と「小なる兵法」の二つに分類する。

兵法といわば、人と我と立ちあうとて、刀二つにて遣う兵法は、負くも一人、勝つも一人のみなり。これはいとちいさき兵法なり、勝負ともに、その得失わずかなり。一人勝ちて天下勝ち、一人負けて天下負け、これ大なる兵法なり。（二二頁）

「大なる兵法」「いとちいさき」兵法という分類は、「兵法家伝書」では具体的に述べられてはいないが、おそらく仏教で言う「大乘仏教」「小乗仏教」の分類を用いたものと思われる。

活人剣が目標であるのならば「一人勝ちて天下勝つ」政治に適用する「大なる兵法」と、「刀二つに遣う」立合いで個人と個人が斬り合う「小なる兵法」それぞれが「活人剣」とならなければならないことになる。ここで宗矩は最初に「大なる兵法」を取り上げる。

「大なる兵法」に、大軍を率いての合戦だけでなく、「治まれる時乱を忘れざる」として国の治め方や為政者の人の遣い方、臣下の役割や務めまでも「大なる兵法」に含める。宗矩はここで「大なる兵法」は「活人剣」であると言いたいのである。万民を救う目的で正義の剣を振るうことは許されるーしか

しこれは政治の論理でしかない。現代でも戦争は国を護るためという論理で正当化される。宗矩が最初に「大なる兵法」を挙げたことに大きな意味がある。これによって將軍並びに將軍より政治の委任を受けた上級武士が、武力を用いる正当性が理論付けられることになる。

しかし宗矩の江戸思想に果たした役割は、単に政治に留まらず、もつと深く江戸思想にかかわっているのである。それは、刀二つで立合う「小なる兵法」が、いかに「活人剣」になり得るかという点にある。「大なる兵法」を使うことが出来るのは為政者であり、為政者は力で自らの行なう戦争や刑罰としての殺人を、世を救う「活人剣」であると言いつけることが出来る。しかし一般の武士は、武士といえども勝手に刀を抜くことは出来ない。切捨てご免といつても、むやみに刀を抜けば、多くの場合、切腹は免れない。「大なる兵法」は活人剣になり得ても、実際に刀を用いて戦う「小なる兵法」は、それだけで活人剣にはなり得ない。

徳川家の御家流としての新陰流を「治にいて乱を忘れぬため」だけでなく、「おのれの修養のためのものとする」にはどうしたらいいか、それが家康が宗矩に与えた最大の課題なのである。人と我と立ち合う「刀二つにて遣う兵法」である「小なる兵法」が、いかにして「活人剣」となるか。これを理論づけることが「兵法家伝書」の大きな目的である。

宗矩はここで「大なる兵法」を理論付けた後、直接「小なる兵法」について語らずに「大学は道に至る門なり。」として、中国の古典「大学」を使って学問論を展開する。

万の事は知らざる故に不審あり。疑わしき故に、その事が胸をのかざるなり。道理があまりかすめば、胸に何もなくなるなり。これを知をつくし、物をつくすと云うなり。胸になにもなくなりたれば、よろずの事が仕よくなるものなり。この故に、よろずの道を学ぶは、胸にある物をはらい

つくさむ為なり。

なぜ修練しなければならぬか。自分の修練が兵法に適っているかなどの疑問は、本当のことを知らないからだというのである。そのようなこだわりがあれば兵法は上達しない。しかし道理が分かれば疑問は無くなると言う。「自分の胸にある物をはらいつくす」ためには、心の囚われを脱しなければならぬ。それには「よろずの道を学ぶ」学に参じなければならぬ。

それではなぜ剣術の修行に学問が必要なのであろうか。剣の修行だけで「胸にある物をはらいつくす」ことは出来ないのだろうか。ここで宗矩と沢庵と三代将軍・家光との関わりが出てくるのである。

家光は元和六年九月元服し、翌年元和七年には宗矩が家光の正式な兵法師範となる。宗矩五十一歳、家光十八歳である。父母に疎んじられて、祖父である家康の命令で将軍となった家光は、家康を崇拜し、また宗矩に、父に対するがごとき情愛を抱く。宗矩の指導のもと、家光は剣術に熱中する。

寛永六年三月、宗矩（五十九歳）は叙爵して但馬守となり、「玉柴拾遺」によれば、この年、家光（二十六歳）は宗矩から新陰流の印可（免許皆伝）を受け、正宗の短刀を宗矩に与えた。しかし免許皆伝を受けたけれども、実戦経験のない家光は、自分の兵法がどれほどのものであるか不安であった。将軍だと思つていい加減に教えるなど宗矩に何度も不安を訴えている。次の書状は寛永六、七年頃のものと思われる。

一、余は兵法を慰みや遊山に使うつもりはない。お前が兵法を一心のすわりどころだと会得し、兵法を自由に使つてのを見たゆえ、余も執心を深くして稽古しているのだ。

一、余が兵法をおろそかに思いよく稽古をしないと、お前が思つているかもしれないから、この書付を見せてやるのだ。

一、上下によらず、武士は一心のすわるころを会得するよりほかのことはないと思ふゆえ、深く執心におもひ、朝夕わすれず心に掛けておるのに、心持ちのいたらぬせいも、さつぱり自由にならない。

一、下々の弟子の心持ちとはちがう。余はお前の兵法をば真実執心におもひゆえ、いつも心から離れたことがない。若いときからお前にはねんころにしてはいる。

一、余の前でよいとばかりほめて、真心から兵法をよきように教えない。これは、お前には似合わしからぬことだ。下々の者でも執心なものにはよく教えるだるうに、これほど熱心な余に、お座なりにしか教えないのはお前にも似合わない。

一、近年、伝書もくれ、こちらからも誓詞を出し、その上、流儀ものこさずつたえてくれたというから、満足しねんころにし、諸大夫（従五位下但馬守）にまでした。しかるに、念を入れて教えてくれないから余の兵法は完成しない。

もつと満足するように教えてくれ。兵法は通りいっぺんでは益がない。心がすわり、おもうままに使えようにならねば益がないとおもふ。これから余が上達するもせぬも、お前の分別次第だ。（後略）



3代将軍・家光は馬に乗って竹刀で打ち合う「鞭打ち」を好んだ。
 図は「川越鞭打」、右上方の傘の下で観戦しているのが家光と思われる。
 『江戸図屏風』(国立歴史民族博物館蔵)

この手紙を読むと、剣に対する家光の熱い、真剣な思いが伝わって心を打つ。しかしこの手紙を見た宗矩は、たとえどんなに家光が兵法熱心であれ、將軍に他の弟子のように厳しい修行を課すことは不可能である以上、実際の剣法の修行より、禅の力を借りて心法を会得させるほうが家光のためになると考えて沢庵を紹介したと思われる。新井白石の『藩翰譜』によると「宗矩、この僧と共に一家の書を撰みて猷り、ことごとく禅を仮りて術をさす。(家光は)たちまちにその妙を得させ給う」とある。

宗矩の最大の課題は、「勝つ」こと以上の剣の目的である「己の修養のため」という家康の考え方を、いかにして家光に悟らせるかということであった。武家の棟梁としての將軍に、泰平の世の剣の修行の目的―剣の修行は「己の修練のためである」―を理解させることで、それを武士そのものの理念としてしようとしたのである。その為に宗矩は旧知の沢庵和尚を、流罪になっている上之山から呼び寄せる。その前に宗矩は沢庵に、自分がこれから書く兵法書の参考になるように、心法上の教えを説く書を書いてほしいと依頼したようである。こうして『不動智神妙録』は成立したのである。それを参考に宗矩は『兵法家伝書』を書きだした。そして同時に家光に、これ以上教えることはない。ただ上ノ山に流罪になっている沢庵が自分の兵法の心法上の師であると話し、兵法の向上に悩んでいる家光を、沢庵に興味を持たせるように仕向けたのである。この間の事情は『徳川実記』に詳説されている。

当代(家光)御年若きよりこの技を好み給い、宗矩御師範にめされ、年頃たゆみなく学ばせ給い、およそ、その法術ことごとくつたえさせ給いけり。宗矩いまは聞え上ぐべき法はみなつきぬ、この上はただ御心にておのずからその妙をば得させ給うべし。ただし宗矩若かりしとき禅僧にちなみ、吾道の要旨を聞きて、頓とんに(たちどころに)道にすすみたりと覚えし事の候いしと申しければ、さらばその僧めせと仰せられしに、済家の一派宗峰

の遠孫沢庵宗彰を推挙したり。やがて沢庵は関東にめされ、宗矩、沢庵と共に一家の書を撰て猷り、禪をかりて術をさとす。にわかには不信の妙をさとらせたまう事ありて、沢庵も遂に御帰依かえりよの僧となりにけり。宗矩、兵法に長じたるのみならず、天下の大体（道理）をよくしり、しばらく禪をかりて術をさとし、術をかりて政事をさとす。よつて御信敬浅からず、常にも吾天下統御の道は、宗矩に学びたりと仰せられしとぞ。（『家光実記』卷六十四）

こうして武士の棟梁である家光において、江戸幕藩体制を安定に導くために「武を己の修練のためにする」という家康の目的は達成された。武士が武術を人と争う手段としないで心の修行をしている限り、幕府は安泰である。これで『武家諸法度』の「なんぞ修練にはげまさらんや」の目的は達成された。しかし極意である「捉われない心」を得るために心の修行をするというだけで『兵法家伝書』の目的は達成されたであろうか。たしかに捉われない心の修行をすることも兵法には必要なことであろう。しかしいくら「心法」の修行をしたところで、剣術に強くはならないことも疑いのない事である。

宗矩自身が「学問してよく物をいうとて、道明らめたる人とも云いがたし。学びずして、天然と道にかなう人も有る也」（二十八頁）と言っている。兵法の極意を得るのに「心法」だけではだめだということ、実は宗矩自身がよく知っていた。「兵法家伝書」には剣を学ぶための心の極意だけでなく、本来学ぶ目的である、新陰流の「刀法」の極意が含まれているのである。「見ること」を極意とする。「是極一刀」に続く「第二刀」の部分を見てみよう。

三、柳生の「敵に随う」

是極一刀の事

是極とは、これ至極なりという儀なり。一刀とは、刀にあらず。敵の機を見るを、一刀と秘するなり。大事の一刀とは、敵のはたらきを見るが、無上極意の一刀なり。敵の機を見るを一刀と心得、はたらきに随いて討つ太刀を、第二刀と心得うべし。これを根本にして、さまざまにつかうなり。（七五頁）

第一刀は、武術を己の修練のためとする家康精神から来ていることは明らかになったと思われる。敵を見ることにより、そこに捉われる心が生じて負けるから、捉われない心の修行をすることが極意の一番であるという。この指摘は、現代でも武術を学ぶ者にとつて最大の課題であることは疑いない。問題は第二刀である。

「敵の働きにしたがつて打つ太刀を第二刀として、それを根本にして、さまざまに使う」―兵法でさまざまに使うのは、もちろん太刀である。手が太刀をさまざまに使う。その方法は「敵の働きに随つて」ということである。宗矩はこの後、またしばらく「とどまらぬ心」を論じた後、「敵の働きに随いて打つ」を『兵法家伝書』の後半で問題にしている。最初に仏陀の後世の弟子に連なる摩拏羅尊者まぬらそとじやの偈げ（仏教の真理を詩の形で述べたもの）を引用する。

一、摩拏羅尊者の偈に云わく、心は万境ばんきやうに随つて転ずてんず。転処てんじょ実じつに能く幽ゆうなり。

右の偈は、参学〔参禅学道〕に秘する事なり。兵法にこの意簡要なる故に、引き合ひにてここに之を記す。参学せざる人は、とくと心得がたかるべし。万境とは、兵法ならば敵の数々のはたらき也。其一つ一つのはたらきに、心が転ずる也。たとへば、敵が太刀をふりあぐれば、其太刀に心が転じ、右へまはせば右へ心が転じ、左へまはせば左へ転ずる、是を万境に随つて転ずると云ふ也。

転処実まことに能く幽こもりなりと云ふ所が兵法の眼也。其所に心があとを残さずして、こぎ行く舟のあとのしら波と云うごとく、あとはきえてさきへ転じ、そつともとまらぬ処を、転処実まことに能く幽こもりなりと心得べし。幽こもりなりとは、かすかに見えぬ事也。心をそこそこにとどめぬと云ふ儀也。心が一所にとどまりたらば、兵法にまくべき也。・・敵の働きをばよく見て、そこに心をとどめば、兵法は負くべきなり。心をとむなと云う事に、この偈を引き用いる也。下の二句は略して之を記さず。参学して全篇はしるべし。兵法には、上の二句にてすむ事なり。(二〇頁・二二頁)

宗矩は摩拏羅尊者の偈の内、最初の二句だけを引用しているが、上泉信網かみいずみのぶの口伝を整理した柳生宗厳「新陰流截合口伝書」では四句とも引用されている。

心は万境に随つて転ず。転処実まことに能く幽こもりなり。流れに随つて性〔自性〕を認得すれば喜びも無し、憂いも無し。

上泉信網がこの偈を信網に語つたかどうかは不明であるが、考え方自体は信網が宗厳むねたかに与えた「影目録」の次の文にあると思われる。

予は諸流の奥源を究め、陰流において別に奇妙を抽出して新陰流を号す。予は諸流を廃せずして諸流を認めず。まことに魚を得て釜せん(魚を取る仕掛け)を忘るる者か。しかるときは諸流の位別になきのみ。千人に英たり万人に傑たるにあらざれば、いかでか予が家法を伝えんや。古人あにいわずや、龍を誅する劍は蛇に揮わず(劍には位があるということ)と。かつまた懸待表裡けんたいひょうりは一遇いちごを守らず、敵にしたがつて転変して一重の手段を施すこと、あたかも風を見て帆を使い、兎を見て鷹を放つがごとし。懸もつて懸となし、待をもつて待となすは常のことなり。懸は懸にあらず、待は待に

あらず、懸は意、待にあり、待は意、懸にあり。牡丹花下の睡猫児ばたんかかすいみょうじ、学ぶものこの句を透得して識るべし。「寝ている子猫が無意識に尻尾を動かすように無意識に動くことが極意であるという意」

新陰流の基本精神である「敵に随う」というキーワードをもとに整理すると次のようになる。

一、新陰流の創始者・上泉伊勢守信網の「影目録」

懸待表裡は一遇を守らず(一つにこだわらない)、敵にしたがつて転変して一重の手段を施すこと、あたかも風を見て帆を使い、兎を見て鷹を放つが如し。

猿廻は敵に随つて動揺して、弱をもつて強に勝ち、柔をもつて剛を制する者

二、柳生新陰流の祖・柳生宗厳の「新陰流截合口伝書」

心は万境に随つて転ず。転処実まことに能く幽こもりなり。流れに随つて性〔自性〕を認得すれば喜びも無し、憂いも無し。

〔参考〕 同書にはまた次のような心法を表す句が見られる。

○心法は無形むぎょう、十方に通貫す

○水中の月、鏡裏の像(手で捉えることは出来ないが確かにある)

○心地、諸種を含む(心には仏性がある)

普雨ふう悉く萌す(遍く雨が降れば、仏の教えが芽を出す)

頓とんに「たちどころに」華性かしやうを悟る

菩提の菓か、自ずから成る

○務めて英雄の心を知る、これは極一刀の習い事

三、江戸柳生の祖・柳生宗矩「兵法家伝書」

心は万境に随って転ず。転処実に能く幽なり。

柳生新陰流中興の祖といわれる長岡房成はこの偈(心は万境に随って転ず)を「截合書外伝四」で次のように解説している。

この大意は本来の心は色々様々の場のままにめぐり移る。而してそのめぐり移る処実によく妙じゃ。此の流転する場にまかせて吾が天より受け来た自性と云うものをわきまえ知り得て失わざる様にすべし。流転する場にて覚え七情(喜・怒・哀・懼・愛・悪・欲)発すれば本来を失う。能く認め得ておれば七情というものも無きなりと云うことなり。

兵法にても本来の心の用(はたらき)は、千変万化に随いて転ずるなり。その転ずる所は実に云うに云われず妙な処なり。さればその流転する処に随って本来の自性を認め得て、失わざる様にすべし。流転する場にて、覚え七情発り、自性を失えば見れども見えず、手足も自由ならざるなり。能く本来の自性を認め得ておれば七情と云うものも無きなりと云う意なり。

七情とは「喜・怒・哀・懼・愛・悪・欲」で、こだわり・執着となつて「心が止まる」元となるものである。天より受け、生まれつき人間に備わった自性をわきまえて失わないようにして心が移るにまかせれば、こだわりがなくなり「手足が自由になる」というのである。心の自由も手足が自由になるためのものなのである。この指摘は重要だと思ふ。

上泉や柳生宗厳・宗矩の説を展開して独特な転論を展開したのは長岡房成であるが、彼以前に「転」を取り上げたのは連也である。連也は、彼以前の長さの異なる竹刀で打ち合う「大転」という勢法「型」に、小太刀勢法であ

る「小転」を付け加えた。また連也考案の刀の鐔に「天地人轉」と彫られたものもある。しかし転論を柳生新陰流の考え方として展開したのは長岡房成である。房成によって柳生新陰流の思想が大きく展開した。しかしそこには武蔵円明流の大きな影響があるというのが著者たちの主張である。そのことを長岡房成の「刀法録」を元に論証することが以下の課題である。

ここで簡単に長岡房成について触れておこう。

桃嶺と号す。宝暦十二年(一七六三)生まれ、没年は嘉永二年(一八四九)。三十一歳で養父の禄二百石を襲い馬廻り(親衛隊)に列し、翌年、寄合となる。尾張柳生家の嗣子・第十代柳生厳久が幼い間、師範代を務めている。長岡家は尾張柳生家に仕えた兵法補佐家であり、また柔術や居合を中心とした総合武道である制剛流の継承家でもある。房成は新陰流の祖・上泉信綱、柳生新陰流の祖・柳生宗厳、尾張柳生初代・柳生兵庫助、三代連也の柳生新陰流の型を集大成し、「刀金録」に纏めた。「金」は「法」の当て字なので、以下「刀法録」とする。さらに時代に合わせて二百本に及ぶ、試合の代わりとなる稽古用の型「外伝勢法」を考案した。これも「刀法録」の中に詳説されている。「刀法録・教習篇」によると、十三歳で柳生新陰流に入門し、三十三歳で免許皆伝、三十六歳で印可を受けている。以下に述べるように、このころ円明流の免許皆伝を受けたと思われる。「刀法録」には、いたるところに「円明流」の術理が用いられており、また同書を読んで分かることは、房成は漢学的素養が大きく、新陰流を理論構成するのに古代中国の兵学書「孫子」や「三略」、また朱子学を用いていることである。まさに文武両道に秀でた、新陰流中興の祖といふべき人物である。この未だ公開されていない、膨大な「刀法録」を、勢法「型」を中心に簡略にまとめたのが、神戸金七の「柳生の芸能」(春風館文庫)である。

四、長岡房成の転論

「刀法録」にある房成の転論を見てみよう。

刀法録諸篇目録二「勢法篇二」一〇頁

転

円石の千仞の山を転ずるが如きものは勢なり。また天地神明、物と推移し変動常無く、敵によって転化する。この両意によって名づけたる者なり。伝に云う古今の必勝なりと。

孫子の意はまろび易き丸き石を千間もある高山の上よりマロパスが如く滞りなく、スズド（鋭）にしてふせぎ止ることならぬは勢なりと云う意なり。その如く身体の働き、円石のコロビて滞り無きが如く敵の間隙へ切り込むことスズドにして敵取り合することならぬを云うなり。三略の意は天地神明の用の、物に因って推し移るものと相ひとしく剛柔強弱変動定まり無く敵の虚実^{しよじ}に因って転変化すということなり。

前半は古代中国の二つの兵法書『孫子』と『三略』によっている。

―円石を千仞の山より転ずるが如きものは勢なり。『孫子』「兵勢篇」

―天地神明、物と推し移る、変動常無く、敵に因って転化する。『三略』

房成はまた円石が山から転がり落ちる比喩に加えて「盤上をころがる珠」の比喩も用いている。「転」を一番よく体現した太刀勢法は「三学円の太刀」で「円の太刀」とも言われる。勢法篇二―四頁には次のようにある。

円の太刀とは円転自在にして滞り無き太刀という事。孫子の渾々沌々として形、円にして敗るべからざる也の意也。・・・円の太刀は心機手足の働き滞りなく盤中の玉のごとき処

尾張柳生十代・柳生巖周の子息で十一代を継いだ「勢法は近代的身体観に従って変えている」柳生巖長の『正伝新陰流』に次のような記載がある。

今、この転という道の（神妙な玄旨でなく）その意義の一端を述べると、それは、おのれの心も太刀も身も、いわゆる盤上の円い珠となって、敵の働きに従って円転・自由・自在な働きをする意、と解して、違わない。

「おのれの心も太刀も身も、いわゆる盤上の円い珠となって、敵の働きに従って円転・自由・自在な働きをする」は転論をよく表現している。特に「ころも太刀も身も」は重要である。『正伝新陰流』には次のような表現も見られる。

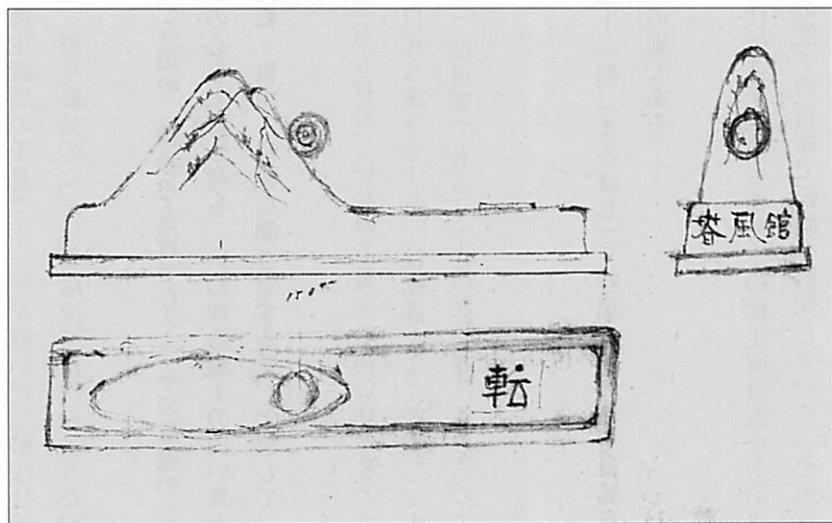
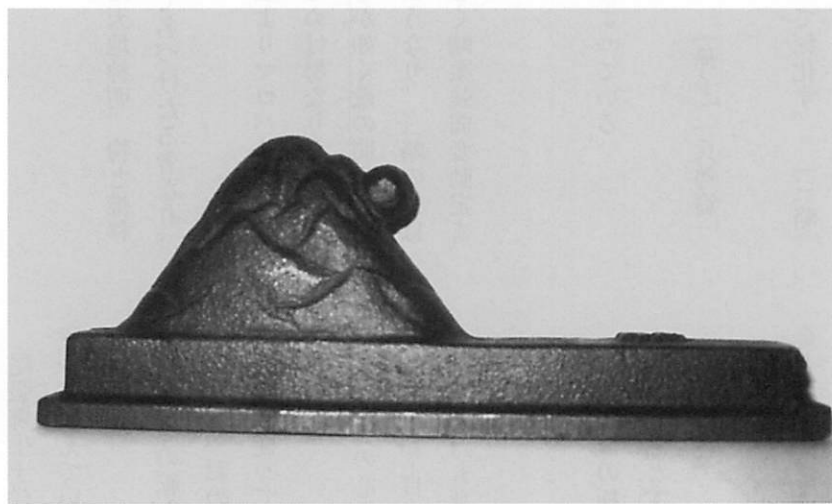
新陰流の極意―「転（まろばし）」の道の、人性の自然自由に則し、これを極意とするの道である。

巖周の、江戸時代の武士が遣ったままの柳生新陰流をそのまま伝える神戸金七は、『柳生の芸能』の冒頭で転論を展開している。その「序文」に次のようにある。

轉

糸石を千仞と山より
如き一力を勢也

孫子兵勢



神戸金七が描いた絵（下）をもとに、加藤伊三男・春風館館長が制作して門人に与えた「轉」の文鎖

当流の兵法は、先師の遺されし左の歌により明らかである。

朝日より夕日もいらぬ陰の流

あらたに巧むまろばしの道

「あらたに巧むまろばしの道」、これが肝要の処で、流祖工夫による「十字勝ち」のことである。

先師の歌に、

十字こそこの一流の大事なれ

魔法に心かけな（かけるな）行く末

江戸柳生では丸橋（まろばしと読む）、尾張柳生では転（まろばしと読む）
といい、江戸では「二十七ヶ条免許の太刀」、尾張では「八箇必勝印可の太刀」として伝えられている。

元来、伊勢守の兵法は、自己を守ると同時に敵の生命を尊重し、その生を断つことを嫌い、ただその戦闘力を失わしむるを主眼としているので、ここに「転」の一道を工夫し、敵、如何なる処より打ちかかるとも、まずその拳を切ることを練磨する方法を勢法に示し、後世に伝えたものである。

「序」に続く「形という事」においては、

「円の太刀」とは孫子の「渾々沌々」として、形、円にして敗るべからざる也の意なり。渾々沌々とは、丸き形の意、即ち円転して滞らぬことなり。奇正虚実の変を備えたる時は円転自在なること、形、円なるものを転ずる渾々沌々として滞りなきが如く、敵より敗れることなくという意なり。さればこの術に於いては、身体よく調いて一致し、身は身、手は手、足は足と離れ離れにならず、自由自在にとけて、固まりちぢける（縮こまる）処なく、心治まり気充て、奇正虚実の変を備え、明らかに観照し、敵に応じてその機の

働くこと、盤を走る珠の如く円転自在なる処をよくよく心悟すべしとなり。

とある。また柳生巖長は「正伝新陰流」で、

三学円の太刀五箇は、流祖が、「転」の道の真体―象徴として、自ら新たに編みだした太刀である。すなわち新陰流の極意の一切は、この五箇の太刀に現わしてある。

柳生巖長も神戸金七も長岡房成の「刀法録」を基に転論を展開している。

転論を柳生新陰流の中心思想として理論付けたのは長岡房成であるが、考え方の元は上泉信綱の「影目録」と尾張円明流の三枝系に伝わる伝書「兵法免許之巻」にあるというのが著者たちの考えである。先ず「影目録」を見てみよう。

上古の流あり。中古念流、新当流、また陰流あり。その外は計るにたえず。予は諸流の奥源を究め、陰流において別に奇妙を抽出して新陰流を号す。：

懸待表裏は一隅を守らず、敵に随つて転変して一重の手段を施すこと、
あたかも風を見て帆を使い、兎を見て鷹を放つが如し。……

燕飛は懸待表裡の行、五箇の旨趣をもつて簡要となす。いわゆる五箇は眼・意・身・手・足なり。猿廻は敵に随つて動揺して、弱をもつて強に勝ち、柔をもつて剛を制する者。

上泉信綱が陰流において抽出した奇妙「極意」は「敵に随つて」ということであり、元々は陰流の太刀勢法であった「猿飛」に含まれていたものであ

り、それを信綱が新陰流の代表的な太刀勢法に直し『燕飛』としている。この点について『刀法録』に次のようにある。

上泉子は天の橋立切れ戸の文殊もんじゆに参籠し、猿飛にて必勝の術を悟り、天下無双の剣となりしと伝う。必勝の術は何れの型にあることなれども、上泉子は分けてこの型にて悟られしとなり。

猿廻において上泉が掴んだ「必勝の術」は、新陰流勢法「型」の第一番目に位置づけられる「三学円の太刀」、特にその一本目「一刀両段」、二本目「斬釘截鉄」になったというのが著者達の考えである。「一刀両段」と「猿廻」を比べてみよう。

「一刀両段」は、使太刀が頭と肩を敵に向けた半身になり、太刀を右脇に引いた全身に隙のある構えで、ゆったりと立つ。敵が肩または頭を打ってくるのに対し、ぎりぎりまで待つて、太刀と身を廻して敵の拳を打つ。「猿廻」では打太刀・使太刀ともに車に構え、打太刀が太刀を廻して使太刀の肩を打っていく。使太刀は左に移動しながら太刀を廻して打太刀の拳を打つ。しかし『燕飛』は六本続け使いなので、拳を打たないで、実際は左脇で太刀を当たるように受ける。ここまでは「一刀両段」に擬せられる。その結果、使太刀の右腕が空いていることになる。そこを打太刀は自分の右肩通りに真直ぐ打ち下ろす太刀筋で打っていく。それに対し使太刀も右に身体を移しながら、右肩通りの太刀で打太刀の右手を打って勝つ。この右肩通りの打ちを「斬釘又は極意の打ち」と言い、三学円の太刀の「斬釘截鉄」となったのである。該当する勢法の部分を比較してみよう。勢法の全体は『柳生新陰流を学ぶ』に掲載してある。なお外国人にも教える機会が多いので英文も載せておくことにする。翻訳は春風館道場門人、アレックス・クラップ氏である。



一刀両段 (ITTOU RYODAN)

Assume the Edozukai Sha position with your hips slightly lowered, your knees bent slightly and show your left shoulder to your opponent.



打太刀

Assume the Seigan position, pointing the tip of your sword at your opponent's left shoulder, and approach.

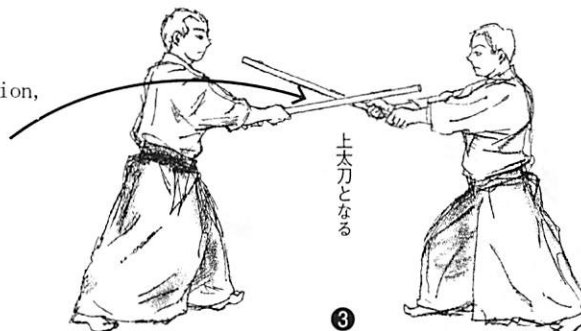


Wait calmly while your opponent approaches and begins his attack.



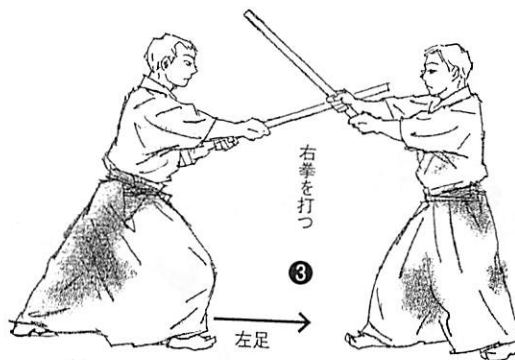
When within range, attack your opponent's left shoulder at a downward angle.

Utilizing your lower back, hips, and legs, in one motion, defeat your opponent's attack by striking his sword.



NOTE: The real method of defeating your opponent is to strike his left wrist, instead of his sword. In this case, the Uchidachi should wear kote.

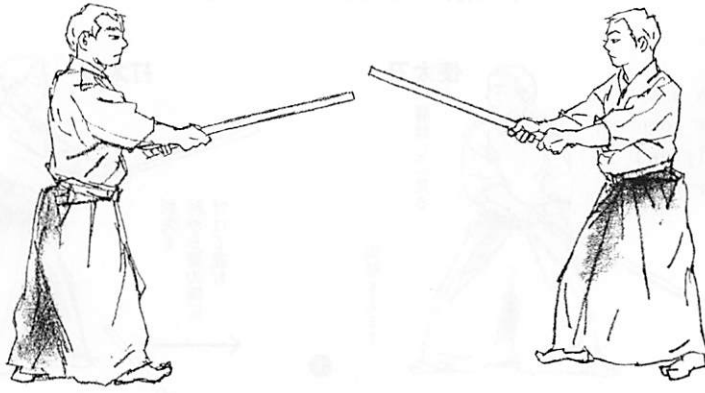
斬釘截鉄 (ZANTEI SETTETSU)



③使太刀: Keeping the sword in line with your right shoulder and right leg, step forward with your right leg and cut straight down onto your opponents right wrist, successfully stifling his attack.

◎使太刀が打太刀の左拳を打つことが本当の勝ち口である。それには打太刀が小手をつけなければならない。

猿廻 (まんかい)



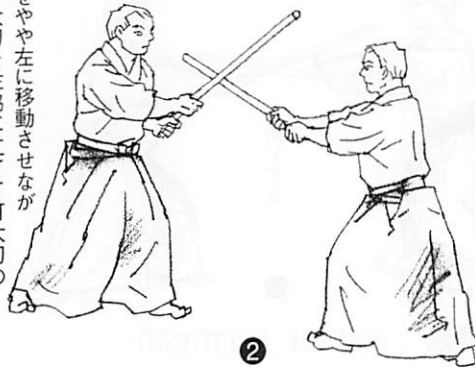
同時に
「猿廻の車」に
構える

「猿廻の車」は足を踏み替え、右足を少し引き一重身となり、太刀をもじり四五度右後ろ、四五度右下に開く。柄中は体の中心となる。



「猿廻の車」の
構えを取る

①



体をやや左に移動させながら、太刀を左脇に立てて打太刀の打ちを止め、(実戦では左拳を打つ) そのまま太刀を起こすだけで、左拳を上げない。止めるだけで打たない。(重心は左軸)

前の左足をやや右前に出して、使太刀の肩を打っていく

②

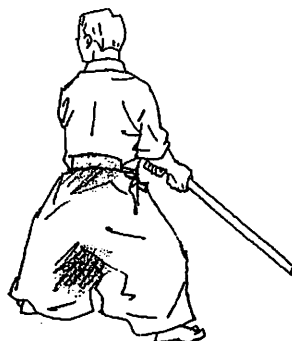


同時に、体を右に移動させながら、極意の線で使太刀の右拳に打ち勝つ(重心は右軸)
○極意の線は斬釘の線が腰の位置にまで下がった線

体をやや左に移動させながら太刀を振り上げ、極意の線で打太刀の右拳を打っていく

③

①打太刀と使太刀: Both simultaneously take the Enkai no Sha position by switching their left legs forward and facing their left shoulders towards each other. The sword is held at a downward, 45 degree angle in front of the body with the handle at the bodies center line.

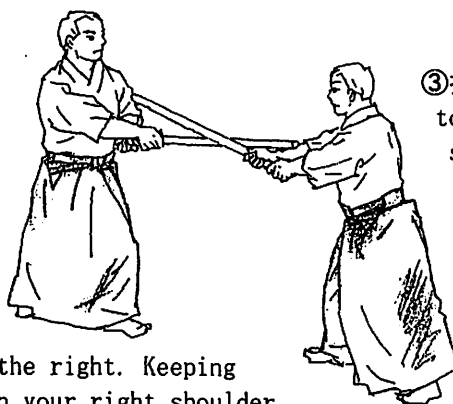


使太刀: As you move your body slightly to the left, bring your sword to the left, edge facing to the left, and intercept your opponent's attack.



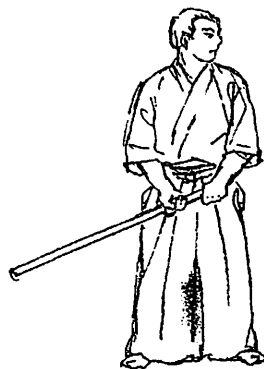
②打太刀: With the left leg forward move slightly forward and to the right and attack your opponent's left shoulder.

使太刀: In time with your opponent move to the right. Keeping your sword in line with your right shoulder and right leg defeat your opponent's attack and cut his right wrist.



③打太刀: Moving your body slightly to the left, quickly brandish the sword close to your body keeping it parallel to your center line. Switching your right leg forward attack your opponents right wrist keeping your sword in line with your right shoulder and leg.

一刀両段 (ITTOU RYOUDAN) 「尾張遣い」



「直立ちの位」で構える

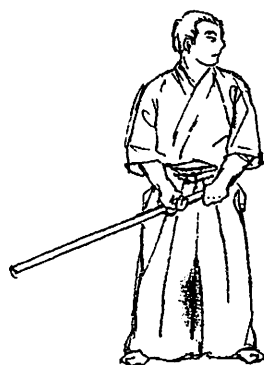
使太刀: Assume the upright Sha position and wait for your opponent to approach.



剣先を肘から
肩の間につけて進む

①

①打太刀: Point the tip of the sword at your opponent between his left elbow and shoulder and approach.



静かに待つ

使太刀: Calmy, tranquily wait.



真つ向に面を打っていく

②

②打太刀: When within range make a frontal, straight attack against your opponent's forehead.

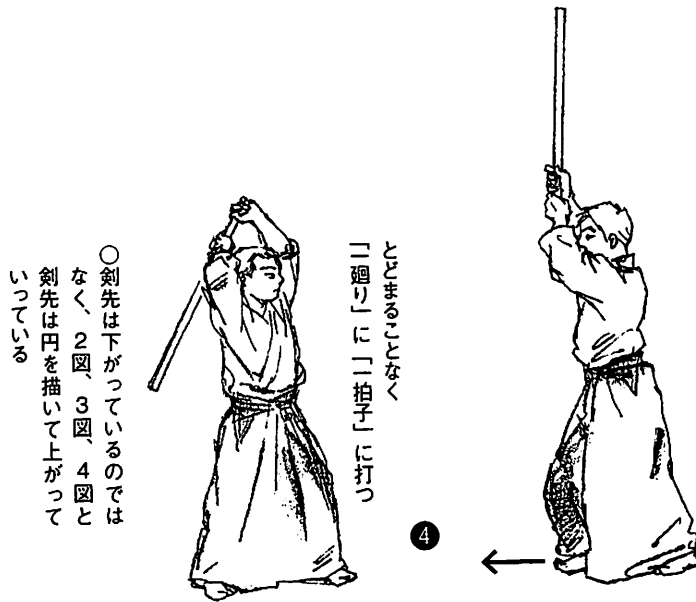
尾張の「ひっかぶり」



ひっかぶるように
太刀を後ろに廻して

③

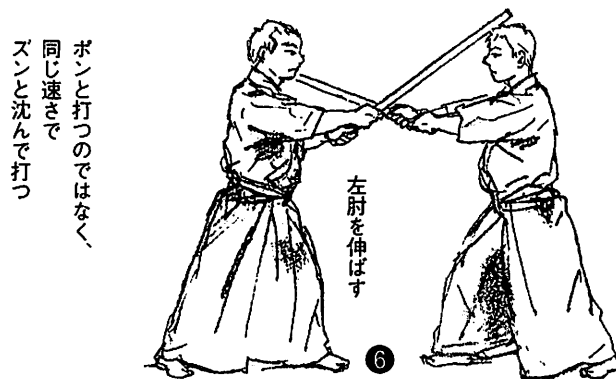
③使太刀: Using the Owari method of twisting the sword up your back, bring the sword above your head.



④使太刀: When having brought the sword above your head, without pause and with perfect timing begin your attack.



⑤使太刀: Activating your lower back and hips drive forward with your left leg toes pointed up, and complete your cut without completely extending your elbows.



⑥使太刀: When the cut has been completed your stance should be strong, your left shoulder should be extended forward and the tip of your sword should stop less than a centimeter from your opponent's forehead. Instead of striking with incredible force, strike with control and focus and smoothly make the attack.

斬釘截鉄
ざんていせつてつ



右手を肩の高さに構え、
攻め込み、
右足を踏出すと同時に
撥草になり、

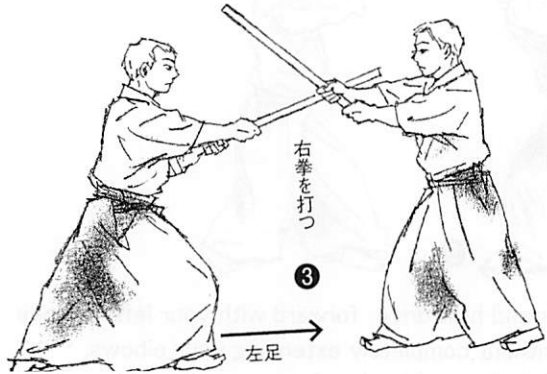
①使太刀と打太刀: Both begin this kata in the Jodan position with their right hands at the height of their shoulders and their swords angled upwards. Both begin their attack simultaneously by stepping forward with their right legs.

応じて相手の打って来ようとする気を制し、すばやく太刀を右肩上に廻し、

左拳を打っていく

②打太刀: Step forward with your left leg while bringing the sword over your right shoulder into the tall Hasso position and strike towards your opponents right wrist.

使太刀: Immediately reacting to your opponent's approach and strike, suppress him by nimbly rotating the sword over your right shoulder.



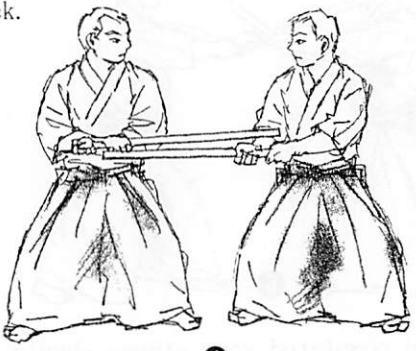
右拳を打つ

③

左足

③使太刀: Keeping the sword in line with your right shoulder and right leg, step forward with your right leg and cut straight down onto your opponents right wrist, successfully stifling his attack.

刃を右斜めに向け打太刀の手首を下に押さえながら、太刀の位置を変えないで横から左足で入身になり(膝をえます)、剣先を打太刀の腹につける。
(ここまでが「打つ足」で、一調子に留まることなく行なう)



④

④使太刀: Leaving the tip of your sword on your opponent's wrist lower his hands with your sword as you step in with your left leg. When entering his space you should only face your left side to him while simultaneously rotating the edge of your sword counter-clockwise 90 degrees in preparation for a thrust.

五、柳生の「転」と武蔵の「巖の身」

以上見てきたように、上泉伊勢守は陰流の「猿飛」の枝から「敵に随って転化する」という考え方を抽出して、それを新陰流の技の中心に置いた。したがって転論は先ず第一に刀法に関する事項である。よく上泉信綱の「敵に随って」を転論の嚆矢〔初め〕とする論を見かけるが、「敵に随って」、は兵法の古典ともいうべき孫子の「因敵而制勝」〔敵によりて勝ちを制する〕、「因敵変化」〔敵によりて変化〕から来ており、上泉の独自の考え方ではない。上泉は孫子の戦略である「敵に随いて」を刀法としたところに新しさがある。前述したように、連也の時代には大転・小転という型があったようであるし、また連也の鐔に「天地人轉」と刻んだ作があるのを見ると、連也にも「転論」の萌芽をみるが、連也は転論を立てていたわけではない。連也は、彼以前の刀の長さの異なる太刀で打ち合う刀法を「大転」とし、新たに小太刀を使った「小転」という刀法を加えたのであり、転を転論として展開したのは房成が初めてである。そこに「円明流」の強い影響があるということが、今回私たちの『刀法録』の解明により明らかになったのである。房成が柳生新陰流の極意とした転論の中心に置かれた「転がる岩」の比喩は、宮本武蔵の円明流から思いついたに違いないという事を、これから論証したい。この論が正しいとすると、武蔵像も柳生新陰流像も、これまでのものと異なった姿を呈することになる。

「岩」について述べているのは、武蔵の「巖の身」である。巖の身は、武蔵が「兵法至極を得た」といっている五十歳の頃に書かれた『円明三十五ヶ条』の三十三ヶ条目に出ている。『円明三十五ヶ条』は私たちが春風館に保管された『刀法録』の中から発見し、『武蔵「円明流」を学ぶ』で公開したものである。現在、岩波文庫になって流布している、武蔵が熊本で書いた細川家本の『兵法三十五箇条』は、『円明三十五箇条』の増補・改定版なのである。

この『三十五箇条』に関して次のような逸話が「昔咄」にある。

武蔵は尾張藩士・長野五郎右衛門という柳生流の達人と試合しようとしたが、五郎右衛門に、あなたの書いた『三十五箇条』という書物は書き損ないで後悔なさっているでしょうと言われ、武蔵は、後悔しているが流布してしまっているので今更しかたない、あの書を作り損ないと申したのは天下に、あなた一人で、あなたは聞いていたより達人であるといって試合をしないで帰り、やがて尾張を立ち去った。この話は、「この時、〔武蔵は〕方々の試合に勝って、〔武蔵は〕尾張に兵法遣い〔剣の達人〕なしと言うであろうと、殿様も御不快に思われていたところ、長野が一言で武蔵を雌伏〔降参〕させたとお聞きになり、はなはだ御悦びなさった。このようなことで武蔵をお抱えなさらなかった」と結んでいる。

これまで『三十五箇条』は細川忠利の求めに応じて熊本で書かれたと信じられてきたので、この話は創作であると言われてきた。しかしこの話の『三十五箇条』は実際に存在したのである。ただ話の内容は、後に竹村与右衛門が名古屋にもたらした『円明流兵法三十五箇条』が流布した後、それと以前からこの地方にあった『三十五箇条』を比較しての、後の創作であろう。尾張の人々は、武蔵を何とかしてやりこめたかったのである。

さて晩年、武蔵は熊本の細川藩に客分として招かれた。そこで藩主忠利は数年前に柳生新陰流の印可と共に柳生宗矩から授かった『兵法家伝書』を武蔵に見せ、これを参考に武蔵の立場から兵法書を書いてほしいと依頼したのでと思われる。細川家本の『兵法三十五箇条』の後書きに「なお不審の処は口上にて申し上ぐべきなり」とあることから、そのことが伺える。ほどなく忠利は脳溢血で倒れ、武蔵は慌てて忠利との約束を果たすべく、『円明三十五箇条』を元に、間に合わせに兵法書を仕立てた。『円明三十五箇条』に、主に一刀を使う柳生流を学ぶ忠利に、自分の流儀が二刀であることの理由を述べた第一条を追加し、また自分の兵法も柳生流と同じで政治にも応用でき

るとした「大なる兵法」論を第二条の初めに追加し、表題に「兵法家伝書」と同じく「兵法」の文字を加えて、結果として条数も一条多くなったが、元のもの「三十五箇条」「五七条」として流布していたので、「三十五箇条」の題はそのまま残して、表題を「兵法三十五箇条」としたのである。しかし改変はそれだけでなく、元々、打たんとする起こりが見えない意味であった「万理一空」を、危篤状態にある忠利への配慮から、「すべては空である」という仏教な意味を持たせて、「兵法三十五箇条」では最後から二番目の三十五箇条目に移したのである。そのために条目の並べ方で筋道立てて深く理解出来た極意に関する武蔵の考え方が曖昧になり「後述」、さらに武蔵理解に関して後世、大きな誤解が生じるようになっていくのである。

ただその後、名古屋に遣わした竹村与右衛門に与えた『三十五箇条』は、すでに忠利亡き後なので、「万理一空」は術理を意味する本来の場所に戻し、追加した第一条と第二条の前半の部分はそのままにして、ただ「三十五條」は、元々は「円明流」の術理書であったので、表題の最初に「円明流」の文字を加え、表題を「円明流兵法三十五箇条」として与えたのである。こうして三種類の『三十五箇条』が存在することになった。

- 一、「円明三十五ヶ条」五十歳の頃に書かれた最初のもの―柳生本とする
- 二、「兵法三十五箇条」熊本で細川忠利に提出したもの―細川家本とする
- 三、「円明流兵法三十五箇条」名古屋に遣わした与右衛門に与えたもの―円明流本とする

以上であるが、武蔵の本当の姿を理解するためには柳生本の『円明三十五箇条』を元にしなければ、特に極意に関しての十分な理解は得られないのである。「敵の身」の条目を提示してみよう。

柳生本「円明三十五箇条」「三十三条」

岩尾の身とは、動く事なくして、強く大なる心なり。万理を得てはよくる心あり。降る雨、吹く風迄も、石に勢あり、心無し。「石の勢いに圧倒されて風も雨も石を避ける。しかし石自体には心はない」

細川家本「兵法三十五箇条」「三十四条」

岩尾の身と云は、うごく事なくして、つよく大なる心なり。身におのづから万理を得て、つきせぬ処なれば、生ある者は、皆よくる心有る也。無心の草木迄も。根ざしがたし。ふる雨、吹く風も、おなじこころなれば、此身能々吟味あるべし。「円明流本も同文」

「万理一空」の「万理」は、この「敵の身」の中にあることが武蔵の極意を理解するための眼目となる。「身におのづから万理を得て」とあるように、「万理」は「心」の問題ではなく、「身」に付ける「術理」なのである。敵の身とは「動くことのない」岩がどっしりと置かれていた姿を示している。「武蔵の兵法でいえば朝鍛夕錬して『円明三十五箇条』の三十二条までの術理を全て身に具えている。」その岩のような「つよく大なる心を持ってば」、その身には自然と万理が備わっているのので、「武蔵の兵法でいえば、そうした万理を身に具えて岩のようにどっしりと構えていれば」草木はその上に根を張らないで、また雨や風もその岩も避けてしまおうという。「武蔵の兵法でいえば、敵はその見えない空としか言えないようなない気迫に押されて引き下がらざるを得ない」武蔵の岩は泰然自若として動じない姿（敵からみれば何も見えないから、これが万理一空の姿である）を示している。武蔵は「この身よくよく吟味あるべし」と言っている。この「敵の身」に関して有名な逸話がある。

ある時、熊本藩主・細川光尚が「敵の身」とはどういうことかと尋ねられた。そこで武蔵は藩主に弟子の求馬助を呼び出してほしいと頼み、御前に伺



候した求馬助に向かい、藩公からお前に切腹を仰せ付けられた、直ちに仕度をするようにと申し渡した。求馬助は理由も聞かずに泰然として命令に従おうとしたが、武蔵は光尚に「巖の身」とはこれで御座いますと申し上げた。

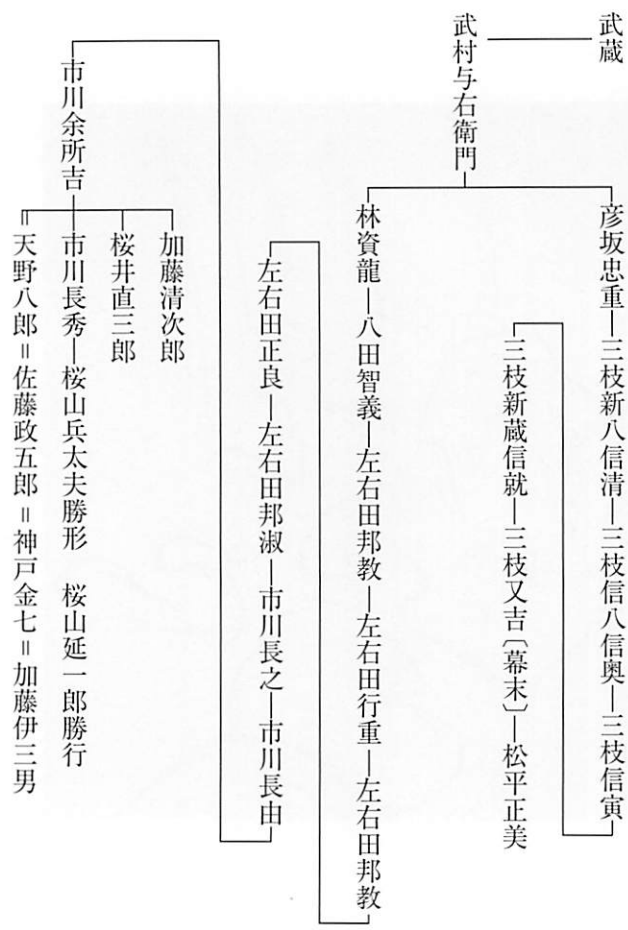
それでは武蔵の岩は平地に置かれてどっしりと動かないのであろうか。またその岩が具えている「万理」とは何なのか。

武蔵は五十歳の初め名古屋の三年ほど滞在し、その間に円明流がひろまったのであるが、三年ほどで名古屋を去ることになる。五十九歳で熊本の細川藩の客分となり、武蔵を招へいた初代藩主細川忠利の死後、名古屋の門人達の要請で、円明流の教授のために弟子の武村与右衛門を尾張に遣わし、尾張藩では円明流は大いに栄えたのであるが、その与左衛門が弟子に次のように説明している。

岩尾の身とは、たとえば山の端より大岩出であり、その石、落つべく共、落つ間敷とも心はなけれ共、見るものはこの石落ちたらばなどと思ひ、あやうき様に思う。その如くに我が身を大岩の様に持ちなせば、敵よりは前の岩を見る者の如くなる事なり。これは先を取り攻心にてからりとして、敵に向かえば、これ岩尾の身なり。

また万理を得ては、よくる心ありとは、岩には何の心はなけれども、何があたりても強き者なり。故にその当たる物の方よりあたりてよけるなり。かくのごとく我が身、岩尾の身になせば、敵よりよくる心なり。また石に情あり心なしとは、石と人の思うは石の情なり。しかれども石には何れ心はなきゆえに、石に情あり心なしと云うなり。また岩尾の身、門を開くと云う事あり。体を強く持つて、心をからりととびらを開けたるようになる事なり。

「巖の身」の岩は「その石、落つべく共、落つ間敷とも」とあるように、平地に置かれているのではなく、山の端に置かれて今にも落ちそうな状態にある。ただ置かれているだけならば、それを見て「この石落ちたらば」と恐怖心を抱く必要はないので「生あるものは皆避ける心」は持たないであろう。山の端にいまにも落ちそうな状態にあるので、それを見ている相手は転げ落ちてくるような恐怖を覚えるのである。孫子の転げ落ちる岩と同じ状態にある。おそらく武蔵は与右衛門に、このように説明していたのだと思われる。ここで武蔵の岩と水を理解するために、円明流の名の言われに言及しておこう。その前に尾張円明流の系統について述べておかなければならない。尾張の円明流は大ざっぱに云って二系統に分かれる。



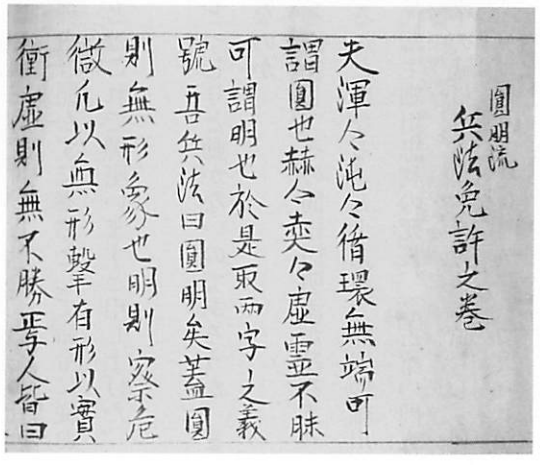
以上が武蔵を初代とする名古屋の円明流の系譜である。左右田系円明流

十四代、桜山兵太夫は明治一八年（一八九）年、八十二歳で没した。子息の延一郎勝行は二刀流の遣い手であったが、相伝は受けていない。また名古屋の武道具店の先代繁吉は大正十二年に小野派一刀流の免許を受け、昭和になつてから三枝系の円明流を学んでいる。また左右田系円明流は、系図にあるように、今日でも名古屋春風館道場に受け継がれている。

ここで円明流の名の言われについて見てみよう。武蔵の直弟子で円明流二代となつた竹村与右衛門は円明流について次のように説明している。
 円曲とは元円明より出る。この形と云えば十字なり。十字をまわしてみれば丸し。構える時は円なり。打ち出る時は曲なり。

また名古屋の桜山家に伝わる、左右田系の円明流十三代・市川武之進が桜山家現当主・桜山欣哉氏の三代前の桜山兵太夫に与えた伝書円明流「五構の巻」（名古屋春風館文庫四に翻刻）にも全く同じ説明がされていることをみると、もともとはこの説明が、武蔵が弟子の与右衛門に語った言葉だった可能性が高いと思われる。一方、寛政九年に三枝信就が発行した「円明流兵法免許の巻」（伊藤繁吉商店蔵、但し写しと思われる）では、その冒頭で円明流について次のように説明している。

それ渾々沌々、循環端なし円と謂う。赫々奕々、虚霊不味明と謂うべきなり。是において両字之義を



取りて號す、吾が兵法、曰く円明

「虚靈不昧」は朱子からきており、「以て衆理を備えて、万事に應じる者なり」と続く。「虚靈」は心を意味し、「不昧」は「曖昧でないことと、明らかであること」を意味している。

全体の意味する所は「心の本体は、目に見えないが鏡のように明らかに万物を映しだす働きをもつ〔広辞苑〕』といったところである。

三枝系円明流
円—夫渾々沌々循環無端・・・孫子——刀法
明—赫々奕々虚靈不昧・・・朱子——心法

さらに長岡房成は「刀法録」「序文」で円明流について次のように解説している。

玄信子〔武蔵〕云わく、万理一空、無一物と。またその許可の書に云わく、渾々沌々、循環端無し、円と謂うべし、赫々奕々、虚靈不昧、明と謂うべし、この両意の義をもつて円明と号す。蓋し円明、形象無し、明則ち危微を察す。凡そ無形を以て有形を撃つ。実を以て虚を衝く。則ち、勝たざるということ無し。夫れ水中の月、鏡裏の像。是れ虚靈不昧、心地諸種を含み、普雨悉く皆萌す〔この文は截相口伝書にある〕。是れ衆理を具えて、万事に應じる者。空手鋤頭を把て、歩行水牛を騎す。西江水、また虚靈不昧、白圭無垢〔白い玉にキズ〔隙〕がない状態・「始終不捨書」の結語〕、月大千を照らす、鏡の教え、円明、皆虚靈不昧、衆理を具えて万事に應じる者なり。

また「刀法録」「諸篇目録二」には次のようにある。

玄信子〔武蔵〕曰く

渾々沌々循環端無し、円と謂うべし、赫々奕々、虚靈不昧、明と謂うべし。刀法に他を求めん哉。上泉曰く、心法無形、通貫十方、水中月、鏡裏像。上泉曰く、心地諸種を含む、普雨悉く皆萌す頓に悟華情了、菩提菓自ずから成る。

これ以降も上泉信綱や柳生石舟斎宗嚴、柳生兵庫助利嚴、柳生嚴包連也と並べて何度も武蔵のこの文を引用している。

房成は武蔵の「許可の書」つまり三枝系円明流の「免許の巻」によって武蔵円明流の名の由来を説明しているだけでなく、新陰流の心法や刀法を説明するのに、この「渾々沌々」と「虚靈不昧」を用いている。房成は武蔵がこれからの語を使ったと信じていたようであるが、武蔵の書にはどこにも見られない。

「渾々沌々」は新陰流の表看板ともいうべき「三学円の太刀」を説明するのに用いられている。

「円の太刀」とは孫子の「混々沌々」として、形、円にして敗るべからざる也の意なり。渾々沌々とは、丸き形の意、即ち円転して滞らぬことなり。奇正虚実の変を備えたるときは円転自在なること、形、円なるものを転ずに渾々沌々として滞りなきが如く、敵より敗れることなくという意なり。（柳生の芸能）一六頁

「虚靈不昧」は上泉信綱「影目録」の説明で引用している。

この睡猫児すいみょうじは睡猫児なれども人々心悟せざれば分らず、冷暖は吞まずんば知れず甘辛は嘗めずんば分らずが如し。会（理解）せずんば先ずよく情識を去つて、人々天に得る処の「虚靈〔心〕不味衆理を具えて、万事に應ずるもの」を研き窮むべし。

上泉氏、石舟斎、如雲斎三子、共に禅学有りし人ゆえ、兵法の要妙をみな禅味によつて解かれしなり。しかれども未だ了解せざる人は、前にもいう「虚靈不味、衆理を具えて、万事に應ずるもの」を、天地一枚の鏡の如き場と心得て能く工夫すべし。禅もまたこの外に外ならず。

房成が見た「免許の巻」は前出の寛政九年（一七九七）のものと思われる。というのは寛政九年というと、房成三十三歳で柳生新陰流の免許を得た年であり、印可は二年後である。また『刀法録』序文は文政十二年（一八二九）で房成六十五歳のときである。以後「混々沌々」と「虚靈不味」は『刀法録』に頻繁に出てくる。しかしこの孫子や朱子の語は、武蔵が書いた書物の中には見られない。おそらく三枝家の誰かが円明流の名の由来について古代中国の兵法書を用いて独自の解釈を加え、それを武蔵の言葉としたものと思われる。しかし房成はこの二つの言葉を武蔵のものとして信じていたようである。

これは今のところ推測であるが、新陰流と並んで円明流を学んでいた房成は、この頃、円明流の印可も受けていたのではないだろうか。後年、尾張柳生家の補佐役としての責任感から、当時盛行した竹刀で打ち合う一刀流系の剣術に対抗するために、試合をしなくても、これらの型を学べば十分であるとして、試合勢法二〇〇本を考案し、さらに新陰流の理論構成の為の新陰流大全ともいべき『刀法録』を書くに当たって、深く傾倒した天下無双の剣である武蔵の円明流の思想と型を柳生流に導入したと考えられる。房成にとつて新陰流と円明流はほとんど一体化していたのである。そう考えなければ房成の、武蔵「円明流」への思い入れは理解出来ないものとなる。その点

を次に見てみよう。

六、『刀法録』の中の武蔵

長岡の『刀法録』には各所に武蔵が引用されている。第一巻「本原篇」の「新陰流兵法外伝刀法録序」に次のようにある。

東方の剣法は我が神代の遺法にして、和漢の良將これを廃することなし。いわんや源義経、剣を学んで平氏を亡ぼすをや。また我が君の祖・東照宮君「徳川家康」はかつて將に箆かたを大阪城に入れんとするの時、石田三成の陰謀あるを察して、剣を平「柳生」宗厳に学びたまう。七日の後、心を安んじ駕を入れたまう。三成これを聞き刺客をして神君の迫らしむる能わず。

ただこの家康と宗厳との逸話は、ここにしか見られず、房成が何を根拠としているのかは不明である。続けて「刀法の祖」を陰流の愛洲移香斎あいすいこうさいとし、それに続く系譜を上泉秀綱―柳生宗厳―柳生利厳―柳生嚴包―徳川義直よしなお〔尾張藩初代藩主〕まで挙げ、「転」や「無刀」「直立つたる身」「中庸ちゆうちゆうの位」など、それぞれの達人の極意を述べた後、武蔵の極意として「直道ちきどう」を挙げている。

円明流の祖新免玄信も亦巡方じゆんぽうしてその地の剣客と試合す。既に無双の剣なり。名、後世に高し。この人、教えるに直道を以つてす。直道とは中道ちゆうどうの謂いなり。すべて先哲の教えを立てるとは此の如し。

また次のような記載もある。

上泉子が截合書〔秀綱の口伝を宗厳が整理した〕に云わく、努めて英雄

の心を知る、石舟斎〔柳生宗厳〕の没茲味書開卷第一義に勇を挙げ、その歌書に仁義礼智を謂う者あり、如雲斎〔柳生兵庫助〕の「終始不捨書」、その初め三皇五帝の徳を挙げて、後に刀法に及び、先ず怯を戒める。円明流奥義書は三達徳〔智仁勇〕を述べ。これみな房成が述ぶる所を以て本となすものなり。

同じような表現は「刀法録諸篇目録 勢法篇二」にもある。

ここに挙げるところの語は截合書の没茲味書・不捨書・枝葉書・宗矩の口伝書・武蔵流の三十五条等の要語なり。間々、房成の愚意を以て補う。

柳生新陰流の解説をするために柳生新陰流の祖・柳生宗厳、尾張柳生の祖・柳生兵庫助、江戸柳生の祖・柳生宗矩と並べて宮本武蔵を挙げているのである。その他「刀法録」の各所で武蔵および円明流の術理書『三十五カ条』を引用している。「刀法録」は現在出版されていないので、未整理な「刀法録」を体系的に整理し直した、神戸金七の「柳生の芸能」から引用してみよう。次に挙げる箇所はすべて「刀法録」にそのまま載せられている箇所である。また〔〕内は「円明三十五箇条」の条目番号である。岩波文庫本は元になった細川家本が後から冒頭に一条追加されているので、番号が一つ後になる。

相雷刀〔八勢法〕五本目 後れ打 順 相架け流す

また五七条に云う、敵の動きの後を打つ。これ二の越しと云うものなり。

〔第二十一条〕また剣を踏む意、これ左足を以て敵の打ちの止まるるところを踏む意〔第十六条〕、また打つと示して太刀は後より打つ意〔第十四条〕、また身は進む身にして足と心とを残し、ぬけず・はらず、敵の心を動かす〔第十二条〕。これみな味わうべし。

中段十四本目 城郭勢

武蔵流、敵の身〔第三十三条〕なり。

中段・下段二十二勢法に関して

また武蔵流に心を放つて敵の動きに従うということあり。そのまま先となる〔第十二条〕と同じ。

相雷刀〔十三勢法〕十本目 外して後、討ち落とす

武蔵流に云わく、身は懸る身にして足と心を残し、敵の心を動かす。〔第十二条〕また二の越し〔第二十一条〕。或いは身を以て打ちを示す時、太刀は自ずから後より打つ心なり。〔第十四条〕。この意、味わうべし。

相下段〔五勢法〕先打の意思

また武蔵流心の章〔心持〕に云う。心を水となし、折に触れ、事に応じる心なり。〔第七条〕味わうべし。

小太刀勢法 小転下段変

すべて短刀は深く入ることを主とす。戸を越すの教え第一なり。

漆膠の身〔第二十七条〕、水月を越し、戸を越す〔第十三条〕ものなり。

両刀円曲

両刀ともに中段にして左右の鋒を交えること、四五寸、太刀を上にして短刀を下にす。円明流にてこれを円曲という。これ身よく太刀の中に納まるものなり。これ武蔵流裏の勢法第一勢なり。よく術を尽すものなり。

両刀下段の円曲

五七条、戸を越す〔第十三条〕、漆膠の附け、漆膠の身、身長方〔第二十九条〕、扉の身〔第三十条〕等、味わうべし。

これらの引用例をみると「敵の動きに従う」「事に従う」は「影目録」の「敵に従う」、また「身は懸かる身にして、足と心を残し、太刀は後から打つ」は「兵法家伝書」の「身足は懸かりに、太刀は待ち」と同じ考え方になっている。房成は、円明流と柳生新陰流の術理は同じと考えていたようである。

またこれ以外にも多くの引用例がある。これらの例で興味深いのは「三十五カ条」を「五七条」、武蔵の流儀を円明流だけでなく武蔵流、武蔵の呼び名を多くの場合、玄信と呼んでいることである。ただ神戸先生が写した柳生文書である「新陰流兵法相伝書六」は前半は「新陰流兵法口伝書」、後半に宝蔵院槍術の術理について説明した文献があり、後半の観見二つの目付を論じた個所に「宮本武蔵三十五カ条」という記載がある。また名古屋市蓬左文庫蔵の延宝甲寅春二月の日付けのある「五七階級巻序」に「小の兵法號して円明と名づく、その章三十五條に及び」と表題だけでなく条数も三十五條と明確に書かれている。

この例でも分るように「三十五カ条」はもともと三十五カ条あったのであり、武蔵が数え間違ったという、これまで一般になされてきた説明は、いかにも無理があり、晩年細川忠利に提出した三十六箇条ある「兵法三十五カ条」は五十代に書かれた円明流の極意書「三十五カ条」を元に書かれたものである。

七、「直通」という極意の太刀

柳生の極意が「転」とすると、武蔵の極意は何なのであろうか。この章の

冒頭で「五輪書」には冒頭の「兵法至極」以外には、自分の流儀には特別な極意はないという言い方で「極意」という語が、一か所使われただけだと述べた。それでは武蔵は極意を問題としなかったのであろうか。

「三十五箇条」に「直通という極意の太刀」という表現がある。「直通」は場合によっては「直道」という語を使っている。柳生本「円明三十五カ条」の最後に置かれた「期を知る」は次のようになっていて、「期」とは「打つべき機会」といった意味である。

三十五、期を知るといふは、早き期を知り、遅き期を知り、のがれる期を知り、のがれざる期を知る。一流直通〔直道〕という極意の太刀あり。この事、口伝なり。

武蔵は最後に極意の太刀として「直通」を置いて、それに対応して後書きに次のように記す。

右三十五箇条、兵法の直通、自他共、実儀に於て相違あるべからず。この道至らざる者は、及ぶべからず。ただ鍛錬肝要なり。秘すべし。云々

後書きは三十五カ条の「直通という極意の太刀」を受けて「兵法の直通、自他共、実儀において相違ありうべからず。この道至らざる者は、この流儀の極意に」及ぶべからず。」と自然な論理展開になっている。三十五カ条の最後の部分の配置は武蔵理解のために重要である。

三十三条「岩尾の身・万理」——三十四条「万理一空」——三十五条「一流直道」という極意太刀——後書き「兵法の直道」となっている。

三十三条の「岩尾の身」で既に「岩尾の身とは、動く事なくして、強く大なる心なり。万理を得てはよくなる心あり。」と「万理」が出ているのであ

る。細川本では「身におのずから万理を得て」となっている。それを受けて三十四条はその敵の身に体现した「万理一空」が肝要であると言っている。万理一空は心の問題ではなく、なによりも身^ニ敵の身の問題なのである。

三十二条までの技の術理や心持をことごとく学んで最後は「敵の身」になつてどつしりと構える。しかしその動かない^ニ「空」であるように見える「敵の身」に兵法のすべての理「万理」が込められている。それが「万理一空」である。そのような相手に対しては敵は避けざるを得ない。これが「岩尾の身とは動く事なくして強く大なる心なり。万理を得ては〔敵に〕避くるころあり。」の意味なのである。「万理一空」の「空」とは、それに続く「降る雨吹く風までも石に勢あり、心なし」の「心無し」の「無し」なので、その空に武蔵の兵法のすべてが込められているのである。

しかし熊本版「兵法三十五カ条」は、重病の床に伏す忠利への配慮から、もともとは術理にすぎない「万理一空」を仏教的な意味をもたせるために最後に置いている。忠利は重病の床にあり、実際は読まなかつたようであるが、もし死に瀕している忠利が「兵法三十五箇条」を読んだとしたら、「そうだ全ては空なのだ」と、大きな慰めを得たことであろう。論理の展開を破つてまでも「万理一空」を最後に移した武蔵に深く大きな心が感じられる。しかしそのために不都合が生じている。流れも、三十四条「岩尾の身という事・万理」三十五条「直道」という極意の太刀——三十六条「万理一空」——後書き「兵法の見立て、心持ちに至るまで大概書く記し申し候」と、せっかくの論理展開〔敵の身—万理一空—直通〕を破つてしまっている。これが現代まで続く武蔵理解の大きな誤解の元となっている。

それでは武蔵の極意である「直通」とは如何なる太刀なのか。今度は「五輪書」で見よう。

「直通」は「三十五カ条」の最後に置かれたように、「三十五カ条」を下敷きとして書かれた「五輪書」の「水の巻」では最後の条目に置かれている。

一直通のくらしいという事

直通の心、二刀一流の実の道をうけて、伝ゆる所也。能々鍛錬して、この兵法に身をなす事肝要也。口伝（七三頁）

また戦いのことを述べた「火の巻」でも最初の総論の部分と結語に出てくる。

独り太刀をとつても、その敵々の智略をはかり、敵の強弱、手立てを知り、兵法の智徳を以て、万人に勝つ所を極め、この道の達者となり、我が兵法の直道、世界において誰か得ん、又いづれかを極めんと慥かに思いとつて、朝鍛夕錬して、みがきおおせて後、独り自由を得、自ずからきどくを得、通力不思議有る所、これ兵として法をおこなう息なり。七九頁

我兵法の智力を得て、直なる所をおこなうにおいては、勝つことうたがいはるべからざるもの也

ここでは「直通」は「直通」「直なる所」となっている。「五輪書」の最後の巻となる「空の巻」の結語でも「直通」ではなく「直なる所」となっている。

直なる所を本とし、実の心を道として、兵法を広くおこない、ただしく明らかに、大なる所をおもいとつて、空を道とし、道を空と見る所なり。

一三九頁

「五輪書」のこのような重要な個所に出てくるのに「兵法三十五箇条」にも「五輪書」にも「直通」についての具体的説明はない。その理由について

は著者たちにも、今のところ解明出来ていない。しかし武蔵が二十四歳で書いた最初の兵法書「兵道鏡」に詳しい説明がある。

二十八、直通の位の事

一、直通の位と云うは、兵法の魂なり。前の太刀数どもは、皆これ、人の躰のごとし。これより外にいる事なし。また除くべき事もなし。もちろん時によりて、少しも出合わざる事もあれども、またいらでかなはざる事あり。たとへば、眼耳鼻舌手足などの様に作りたる物なれば、この内一つ除きても、かたわになるべし。またここに云う太刀数、皆流つう自在に覚えぬれども、直通の位の心魂なれば、狂気酔人証なき者に同じ。何れの太刀も追取り、先をかけ見るに、敵打つ所の星、見ゆるものなり。その時、合う太刀、合わざる太刀を見分け、間を積り、一念に思う所の星を、少も違はず、たとえ大地は打ちはずすとも、この太刀努々外る事なかれと、おそろしき氣を捨て、こここそ直通一打の所なれば、力に任せて打べし。また敵を入り取るも相違なし、つるつると懸り、はや手に取つきたると思ひ、如何程もふかく懸るべきなり。直通の心なき太刀を、死に太刀と云うなり。よく分別して見るべし。

「兵道鏡」は二十三歳の武蔵が吉岡一門との三度の真剣勝負に勝利して、「天下」になったという自信の元に、次の年に書いた兵法書である。そこには三度の闘いの太刀筋が書かれていると思われる。後書きに「此ノ条々、学バズンバ、争デカ勝負ヲ決センヤ」と書かれていることでもそのことは明白です。その中でも特に「直通」の太刀がなければ狂人や酔っ払いがむやみに太刀を振り回しているようなものだというのである。

たとえ大地は打ちはずすとも、この太刀努々外る事なかれと、おそろ

しき氣を捨て、こここそ直通一打の所なれば、力に任せて打べし。

これこそが生涯変わらない武蔵の極意なのである。武蔵は「兵道鏡」の後書きに「円明流 天下一 宮本武蔵守 藤原義輕」と署名している。

武蔵の極意が「直通の位」だということは房成も言及している。「刀法録」の序に上泉伊勢守に続く柳生新陰流の系譜を上泉秀綱―柳生宗厳―柳生利厳―柳生嚴包―徳川義直〔尾張藩初代藩主〕まで挙げ、「斬」や「無刀」「直立つたる身」「中庸の位」など、それぞれの達人の極意を述べた後、武蔵の極意として「直通の位」挙げている。

円明流の祖新免玄信も亦巡方してその地の劍客と試合す。既に無双の劍なり。名、後世に高し。この人、教えるに直道を持つてす。直道とは中道の謂いなり。すべて先哲の教えを立てるとは此の如し。

「直道とは中道の意味である」という点は現在の処よく分からない。房成の漢字的解釈と思われる。また武蔵の直弟子の竹村与右衛門の弟子左右田邦俊は次のように語っている。

八田氏円流の語に、直道を以て打つ時は、天下に敵なしと云えり。

吉岡一門との真剣勝負や佐々木小次郎との嚴流島の戦いでは明らかに直通の位が使われた。武蔵の養子・宮本伊織が建てた「小倉碑文」によると、清十郎との戦いでは「武蔵の」木刃の一撃に触れ、吉岡、眼前に倒れ伏して息絶ゆ」とあり、第二の伝七郎との戦いでは「武蔵その機に臨み〔隙を見て〕彼の木刃を奪い、これを撃ち、地にたおす。たちどころに死す」となっている。三度目の吉岡一門との決闘では、おそらく二、三十名の吉岡一門の武者を、

武蔵の方から先をかけて、追い回して勝利している。武蔵の極意である、「先をかける」ということが遺憾なく発揮されたものと思われる。巖流島での小次郎との決闘では「木戟の一撃を以って之（小次郎）を殺す。電光なお遅きがごとし」とある。すべて一撃で倒している。

真剣勝負をしなくなった三十歳以降の木刀を使った試合でも「直通の位」が使われている。武蔵は大坂夏の陣では徳川方の大将・水野の旗本として戦っている。大きな木刀で、雑兵を「橋の左右へなぎ伏せ」ている姿が目撃されている。

戦後は故郷の姫路に帰って道場をひらいていたようである。道場の看板に「日本第一剣術の達人宮本武蔵」とあったのを、新たに姫路に着任した武勇で名高い本多家の藩士たちが怒りだし、藩随一の達人・三宅軍兵衛を武蔵の道場に送って勝負となった。

軍兵衛は東軍流の得意、かつたびたび戦場に出て心得のある者である。木太刀を執れば武蔵もまた同じく二刀を執り、たがいに角と角とに退がり、武蔵は二刀を併せて組む円曲えんまがまの構えで軍兵衛の鼻先へ突きつけた。

軍兵衛は手もなく武蔵に敗れてしまう。また兵法の極意を得たと言っている五十歳の初め、円明流を御三家の筆頭尾張藩に広めようと名古屋に赴き、藩主・義直の前では藩士と立会うが、

武蔵、組みたる二刀のまま、大「大刀」の切っ先を相手の鼻の先へつけて、一間の内を一編回し歩きて、勝負かくの如くに御座候と、申しあげし。

いずれも相手を追い詰めて勝っている。円明流の全ての術理「万理」を内に含んで、敵の身になって相手に迫っていく。しかしその姿に打ち込む隙や

打とうとする技の起りは見えない。それを「空」という。その氣迫に追い詰められた相手は義直の家来のように下がるか、軍大夫のように無理に打ち込まざるを得ない。武蔵は相手の動きが全て観の目で見えているので、相手の動きに随っているだけである。相手の動きに随うという点では柳生流と同じである。それでは柳生流と武蔵流との違いはどこにあるのだろうか。「先」の考え方の違いにある。宗矩の「兵法家伝書」と武蔵の「五輪書」を比べてみよう。

「兵法家伝書」

敵の先せんをおびきだして、敵に先をさせて勝つなり。ここを以て、身足は懸に、太刀は待なり。身足を懸にするは、敵に先をさせむ為なり。（身と太刀とに懸待の道理ある事）三十六頁）

とにかく敵に先をさせて勝つ也。（心と太刀とに懸待ある事）三七頁）
とにも角にも此の道は、表裏を本として様々に序を切りかけ、色をしかけて、敵に先手をさせて勝つ分別ばかりなり。「風水の音を聞く事」四八頁）

「五輪書」

何時にても我が方よりかかる事にはあらざるものなれども、同じくは我が方よりかかりて敵をまわしたき事なり。（三つの先という事）八四頁）
兵法勝負の道にかぎって人に我が身をまわされて後につく事悪しし。いかに敵を自由にまわしたきことなり。（枕を抑ゆるという事）八四頁）

柳生流の場合は「とにかく敵に先をさせ」る。柳生流の第一本目の太刀である「一刀両段」に象徴的に現れているように、太刀を後ろ向きに下げて構え、左半身をガラ空きにして敵に差し出す。そして敵が先に懸ってくるのを動かずに待つ。そしてガラ空きになった頭か肩に敵が打って来る場合、ぎり

ぎりまで待つて、太刀と身を丸く回して敵の拳を打つ。

しかし武蔵は「同じなら自分の方から懸って敵を引き回したい」と言っている。最終的に相手の動きに随う点は同じであるが、ただ待つのではなく積極的に攻めることで相手の動きを誘う。攻められた敵はたまたまに動く、その動きから生じる隙に随って勝つ。柳生流にも誘いはあるが、「九箇の太刀」に見られるように、柳生流の場合は技を仕掛け、その瞬間待つことで相手の攻撃を誘う。柳生流ではそれを「迎え」と呼ぶ。その意味ではやはり敵に先をさせているのである。しかしこのようなやり方に、宗矩の時代にすでに批判はあったようである。宗矩の時代にすでに「新陰は柳生殿より悪しくなり申し候」という批判があったことを宗矩の長男・十兵衛自身が書き留めている。また十兵衛についても紀州藩に伝わる柳生新陰流である西脇流の伝書「新陰流由緒」に、新陰流はもともと先をとって勝つことを第一としていたが、十兵衛より、「敵の動きを待つて、その弱身へ先を取り勝つ事を修練し、…古流と違いのびのびと和やかに敵の動きを受けて勝つ心持」（『南紀徳川史』）になったと書かれている。しかし宗矩の言葉に「勝つことは存せぬが、負けぬことを存じおる」とあるように、太平の剣を目指す宗矩はそのような批判を甘んじて受けたと思われる。

しかし柳生流の免許皆伝を受けた細川忠利が武蔵を熊本に呼んだのも、島原の乱を体験し、薩摩藩や毛利藩などの、いつ反乱を起こすかもわからない外様大名に囲まれて、「九州の目付」の役を受け持たされた忠利は、柳生の活人剣では「九州の目付け」の役目を果たすことは出来ないと考えていたからだと思われる。次に実際に円明流の太刀筋を見てみよう。

八、尾張円明流

円明流はこれまで一般的には明治になって絶えたと言われていたが、名古屋

屋の春風館道場では神戸金七かねきちにより円明流の技が伝えられ道場で稽古されている。平成元年日本古武道協会発行の『日本古武道総覧』の「尾張貫流槍術」の項にも「とのもの（外の物）太刀として新陰流、円明流、神当流しんとうりゅうより伝来の形も修練することになっている。」と記されている。春風館道場に伝わった円明流は左右田系の円明流であるが、左右田家が断えた後、槍の市川家に伝えられたものである。神戸金七より、尾張貫流相術、柳生新陰流と共に円明流の実伝を受けた加藤伊三男は尾張円明流実伝じつでん十六代継承者にあたる。

円明流一本目では、相手の顔に付けられた小太刀は直通の位でもって攻める勢いを示して、先をかけて進んでいく。その勢いに押されて、相手は思わず、仰け反るか、無理に打ち込むかしてしまう。その相手の動きにしたがって右に構えた太刀が方円の器ほうえんにしたがう水となって、相手の気迫に押されて現れた隙にゆっくり激水のように打ち込まれる。武蔵の型は本質的には、この一本目に全てが込められているのである。春風館道場関東支部では十一本の型稽古の他、一本目、二本目、五本目を使って、自由稽古を試みている。打太刀は一本目の面を打つか、二本目の大刀を握った右拳を打つか、五本目の小太刀を握った左拳のどれ打てもよいと決めておく。使太刀はどこを打ってくるか見定めてから、決められた型通りの受け方をしなければならぬ。この稽古で相手の動きをよく見て、相手の動きに随う訓練をすることが出来る。最初は一本目と二本目だけを決めておくが、慣れてきたら三本目を追加する。三本目の見定めと左の拳を引くことは中々難しい稽古である。左拳は打たれることが多いので厚い手袋か指懸ゆがけを付けておく必要がある。この稽古で型稽古だけでは味わえない自由稽古が出来る。しかしこの自由稽古はあくまで私たちが編み出した稽古方法であって、本来の円明流とは関係がないことを付言しておく。

尾張円明流一、二、三本目

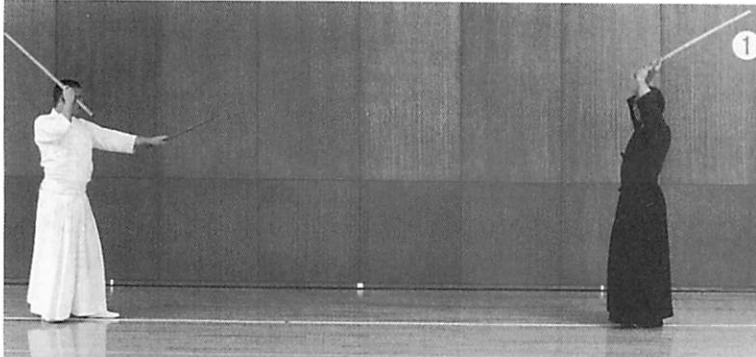


上段

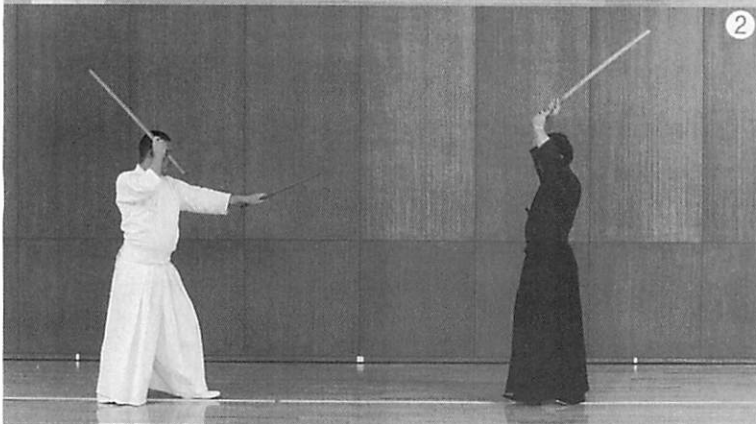
左の小太刀は相手の顔に付け、攻める勢いを示す。太刀は右の鬢の辺りに四十五度に構える。そこから足腰の力を使ってそのまま切りつける。二天一流のように肩にかつぐように構えると、円明流の立場では遠心力を使った太刀筋になるように思える

打・雷刀

使・左手中刀を上段にして、切先は打太刀の左眼を指し、刀を斜めにして身を防ぐ。大刀は撥草勢にたち、左脇を先にする



相懸かりに進む



一本目

打・使太刀の頭を打っていく
使・中刀でもって相架け止め、
るいは足を打つ



二本目

打・逆に深く使太刀の右拳を打つ
使・大刀を以て相架け止め、
中刀を以て撞く



五本目

打・左拳を打っていく
使・中刀を引き、同時に大刀で頭を打つ

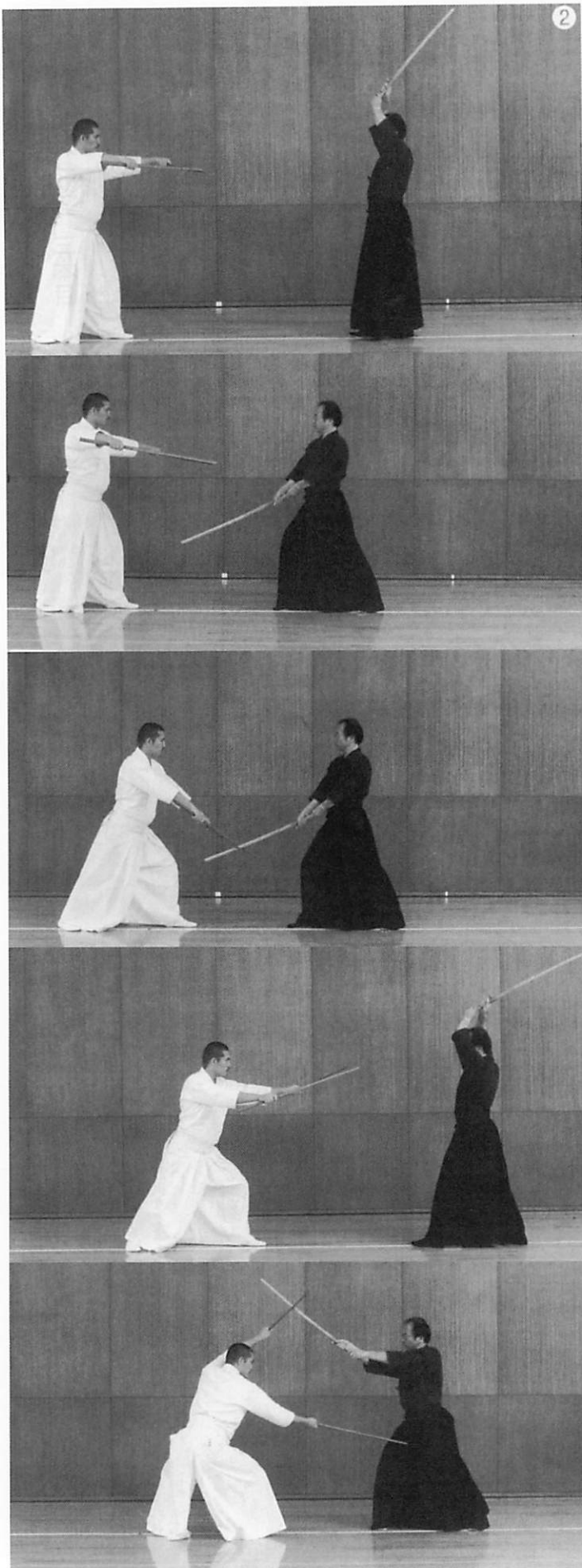


尾張田明流六本目



円曲
 肩、拳、剣先を次第に低く、水が流れるように構える。剣先に打つ気を見せないで、相手の打ちを誘う。二天一流では剣先を上げて構えるようであるが、田明流の立場でいえば、それでは相手は警戒して打ってくる気が起きないのでないだろうか

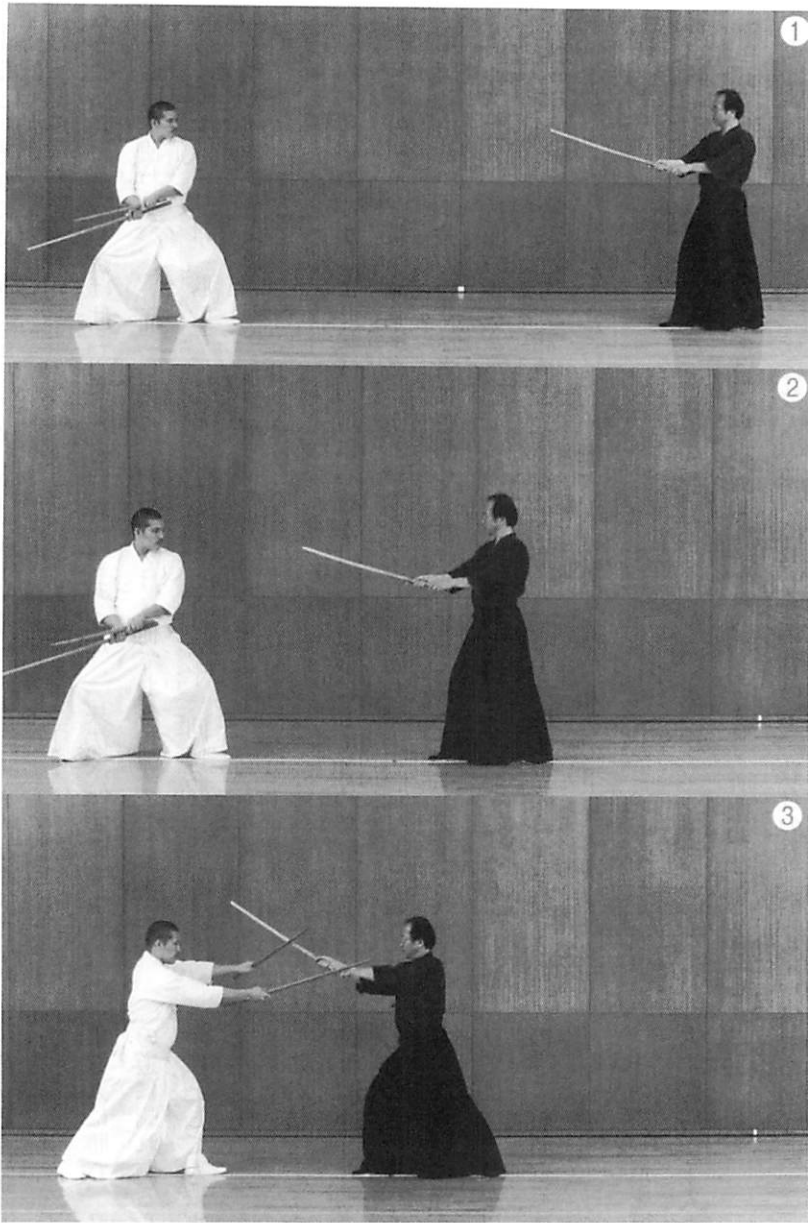
打・雷刀
使・円曲の構え
 相懸かりに進む



使・その瞬間、両刀を開く
打・退って雷刀に振りかぶる
使・両刀を突き出し攻める

打・使太刀の頭を打っていく
使・中刀でもって相架け止め、大刀でもって膝あ
るいは足を打つ

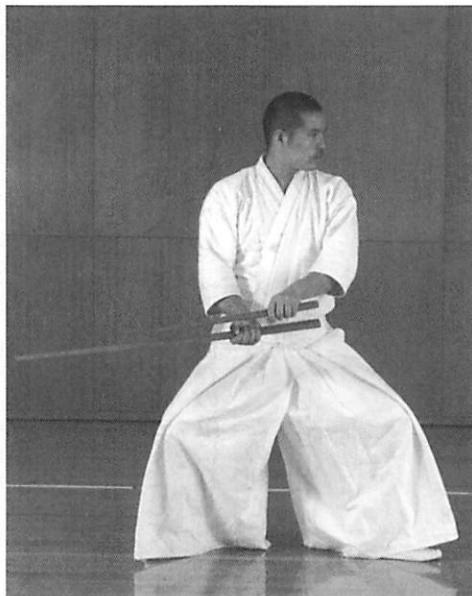
尾張円明流十本目



① 打・脇構え
使・両刀、下段の車に構えて待つ

② 打・攻め進む

③ 打・肩を打っていく
使・中刀で打太刀の太刀を相架け止め、大刀で拳を打つ



車
新陰流の車の構えと似た構えである。二刀を重ねて右脇に構える

九、武蔵の「勝人剣」

新陰流の極意書『兵法家伝書』は「こころを止めない」が多く遣われた。心を一か所の留めないで敵に従って太刀と身を転換して勝つ——転が極意とすると、それでは「敵に随う」という点で、柳生と武蔵はあまり変わらなことになる。武蔵固有の極意とは何であろうか。新陰流の技法の極意である転の根底にある心がけは「心をとどめぬ」であつた。『兵法家伝書』では三十三回も使われた。「直通」を支えている心がけは何であろうか。『五輪書』で多く使われる語は「勝つ」である。『五輪書』では六十一回使われている。いくつか例をあげてみよう。

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初めて勝負をす。その相手、新当流有馬喜兵衛といふ兵法者に打勝ち、十六歳にして但馬国秋山といふ強力の兵法者に打勝つ。廿一歳にして都へ上り、天下の兵法者に会い、数度の勝負を決すといへども、勝利を得ざるといふ事なし。その後国々所々に至り、諸流の兵法者に行合ひ、六十余度まで勝負すといへども、一度も其利を失なわず。其程、年十三より廿八、九迄の事也。(九、十頁)

武士の兵法をおこなう道は、何事においても人にすぐる、所を本とし、或は一身の切合に勝ち、或は数人の戦いに勝ち、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ。これ、兵法の徳をもつてなり。(十三頁)

剣術一通の理、さだかに見わけ、一人の敵に自由に勝つ時は、世界の人に皆勝つ所也。人に勝つという心は千万の敵にも同意なり。(二十二頁)

太刀は兵法のおこる所也。太刀の徳を得ては、一人して十人に勝つ事也。一人にして十人に勝つなれば、百人にして千人に勝ち、千人にして万人に勝つ。(三十頁)

この法を学び得ては、一身にして二十三十の敵にもまくべき道にあらず。先づ氣に兵法をたえさず、直なる道を勤めては、手にて打勝ち、目に見る事も人に勝ち、又鍛錬をもつて惣躰自由なれば、身にも人に勝ち、又この道に馴れたる心なれば、心をもつても人に勝ち、この所に至りては、いかにとして人にまくる道あらんや。(三十七、八頁、地の巻の結語)

この法をおこなう事、武士の役なりと心得て、今日なきのうの我に勝ち、あすは下手に勝ち、後は上手に勝つと思ひ、この書物のごとくにして、少しもわきの道へ心のゆかざるやうに思ふべし。縦ひ何程の敵に打ち勝ちても、ならいに背く事におゐては、実の道にあるべからず。この利心にうかびては、一身を以て数十人にも勝つ心のわきまへあるべし。(七十四、五水の巻の結語近く)

その勝つ道を儘に知る事、わが道の兵法也。然るによつて、一人して十人に勝ち、千人をもつて万人に勝つ道理、何の差別あらんや。(火の巻の冒頭近く)

剣術の道になつて、敵とた、かい勝つ事、この法聊か替る事有るべからず。我兵法の智力を得て、直なる所をおこなうにおいては、勝つことうたがい有るべからざるもの也(火の巻の結語)

吉川英治の人間形成を求める武蔵はもちろん、国の政治にかかわる「大

なる兵法」を求めた武蔵像は、実在の武蔵とは全く関わりのない江戸末期の儒教精神からみた誤解にしかすぎないことは前者で論証した。『兵法三十五カ条』の第二条の前半にある「大なる兵法」論も後から付け加えたものであることも、柳生本『三十五カ条』を資料として論証した。武蔵は生涯「勝つ」ことを求めたのである。『五輪書』の冒頭での武蔵の言葉によれば、十三歳から二十八、九歳までの間に六十余度まで勝負を決すといえども、一度もその利を失わず、その後も自分から求めて真剣勝負はしなくなったが、何度も試合をして勝ち、大阪夏の陣では大木刀で雑兵を右に左になぎ倒した武蔵は、やはり生涯勝つことを求めたのである。

武蔵はなぜ勝つことを求めたのか。それは彼が「天下」を求めたからなのである。「天下」は安土桃山時代の時代精神である。信長は職人同士を競わせ、名人には「天下」の称号を与えたので、あらゆる職種で技を競い合い、個人の能力が物をいう時代が生まれた。信長自身は「天下布武」の旗印の下、武力で「天下」を目指し、足利幕府を滅ぼした後、「天下殿」と呼ばれるようになった。時代精神から云えば、信長が本能寺で倒れた年に生まれた武蔵は「信長の子」といえる。その天下の精神は秀吉に受け継がれ、政情が一時的に安定した桃山時代は芸術家や文化人が「天下」を目指した。秀吉は大阪城を天下一の象徴としようとした。『五輪書』で、武蔵が仏者・儒者・医者・歌道者・茶人・弓法者・その他、諸芸、諸能に携わる様々な職種の者達が、それぞれの道に励んでいると言って、身分による差別のない職分論にも似た立場に立ち、武士は武士の本文である兵法に努めなければならぬとして次のように云う。

武士の兵法をおこなう道は、何事においても人に優れることを本とし、或いは一身の切り合いに勝ち、或いは数人の戦いに勝ち、主君のため、我が身のため、名をあげ身をたてんとする、これ、兵法の得をもってなり。

武蔵の養父・宮本無二は「扶桑（日本）第一の兵法者」といわれた室町將軍家兵法師範・吉岡憲法と試合して勝ち、「日下（天下）無双兵術者」という称号を得ていた。武蔵は養父を越え、「天下」を目指した。そして「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を煉」として鍛錬に励み、ついに「我が兵法の直道、世界において（自分以外に）誰か得ん」という境地に達したのである。朝鍛夕錬して兵法の術理の悉く（万理）を我がものとし、それを全て捨て去って空となって（一空）敵の前に「敵の身」になって、勝つために先をかけて攻める気迫を以って立つ。その巖の身となった勢いに敵の心に避ける隙が生じる。その敵の隙に随って直通の一撃を加える。これが武蔵の極意なのである。

それでは「敵の心の避ける心を生じさせる」巖の身となった武蔵の体はどのような状態になっているのであろうか。武蔵の身体論を見てみよう。二十四歳で書いた「兵道鏡」と五十歳の頃書いた「円明三十五箇条」、六十四歳の「五輪書」の第一条を見てみよう。

十、武蔵の石と水

最初に「兵道鏡」の身体論を見てみよう。

一、心持の事

心の持ち様と云うは、まず仕合せんと思ふ時、平生の心よりは、なお静かになって、敵の心の内を引き見るべし。……平生稽古の時よりは、心やすく自在にしたき事をして、いかほどもゆるゆるとしたる心にて、大事にかくる事肝要なり。転変肝要なり。

増補「前八の位の事」

いかほども、なり（身形）気高く、手つき、いと美しく、足おとなしく、とびても廻りても、身なり、ろく（真直ぐ）に、いかほども静かに、きっかりとして、下（下半身）は揺るぐとも、上（上半身）の動かざるように、たとえば空より繩を降ろし、つり下げたるものと心にあるべきなり。この儀、一段面白きたとえなり。（『兵道鏡』は『武蔵』『円明流』を学ぶの資料篇参照）

これらの表現に表れた武蔵の身体使いを見てみると、踵を地につけて、頭は上から垂直に吊り下げられてといったふうに体の軸が真直ぐに通っている。しかしその軸が揺るいでいる。

垂直線を崩さずに、下半身は揺るいでいる。勝負のときは「平生稽古の時よりは心やすく、自在にしたき事をして、いかほどにもゆるゆるしたる心ので、大事にかくること肝要なり。」（第一条）、太刀の持ち方は「ゆるゆると構え」（第十二条）とあるように、心も太刀を持つ手もゆるゆると揺るいでいる。

それでは敵の身となった武蔵の体はどのような状態になっているのであるうか。長岡の転論の中には、石が山からころげ落ちる例とならべて水が勢よく流れる例が挙げられている。石が山から落ちる例を挙げたあとで「水の物に應じて遂に勢いをなすごとく、自然に應ずる勢いなり。故に兵の形は水に象るといえり。」と、岩と並べて水のたとえを出している。

転とは変動常無く敵に因って転化するというより出たる事にて、変動する事は、常に定まる事なし。敵の仕懸け千変万化、吾が因て転化すという事なり。その転移変化する勢、円石を千仞の山に転がすの勢なりという意にて、まろい安（易）き丸き石をまろ（転）い安き高山の上よりまろばすが如く、滞りなくする（銳）とにして、ふせぎそむる事ならぬ勢なり。これは直立て自由自在なる身にて、敵の負け来る処なり。速に転化する勢いを言うなり。この勢い常に定まりたる事なし。水の物に應じて速に勢い

をなすがごとく、自然に應ずる勢いなり。故に兵の形は、水に象るといえり。一人の勝負も道は一なり。『長岡房成兵法論』「転之説」〔史料柳生新陰流二四一頁〕

ここで房成は石が高い山から転げ落ちる例だけでなく、水の例を出しているが、水というと、これも武蔵の書に多く用いられている。

「三十五ヶ条」「心持ちの事」

心の持ち様は、めらず、からず、たくまず、おそれず、直に広くして、意のころおもく、心を水にして、折にふれ、事に應ずる心なり。水にへきたんの色あり、そうかいもあり。能々吟味あるべし。

「五輪書」「地の巻」

第二 水の巻。水を本として、心を水になる也。水は方円のうつわものに随い、一滴となり、そうかい（青海原）となる。水に碧たんの色あり。きよき所をもちいて、一流のことをこの巻に書き頭わす也（二二頁）

「事に應じる」、「方円のうつわもの（四角や丸の器）に随う」という言いは、新陰流の「敵に應じて」や「心は万境に従って転ず」を思い出させる。長岡房成は武蔵にも柳生にも、事に應じて自在に動く石や水を見ているのである。『刀法録』全体の序文で刀法録巻一の「新陰流兵法外伝刀法録本原篇」の序文の結語は次のようになっている。

水は無情、故に性、自然の勢に任せて能く堤を蹴り、石を漂わす。人は有情、故に常人学ずんば、「自然の勢いに任せる石と違って」性、自然の勢に任せて勝ちを制する能わず。これ過不及（情があるために多かつたり

少なかったり」有るなり。是を以て兵形、水を象ると雖も、「石と違つて人は」学習せざれば象るべからずなり。学ぶ者は能く辨るべし。謂う所、性を率す、これを道と謂い、道を修める、これを教と謂う。これ刀法の本原、豈その別に法ある哉。直に道理を枝に寄すのみ、右道德と云う。

剣を学ぶ目的は、自らの生れついた本性「自性」は水のようにあらゆる変化に従うということ学ぶことだということである。

武蔵の岩は方円の器に随う水のようになっているのである。むしろ水が激流となって山から流れ落ちるイメージなのである。台風や津波における水の怖さは岩が山から転げ落ちる勢いに勝るとも劣らないものがある。転げ落ちる岩は障害物にぶつかって破壊するが、台風や津波の激流は障害物を取り巻いて全てを流し去るのである。武蔵の謂う「物にに応じて」はそのことを指すのであろう。

実は日本の兵学や兵法に大きな影響を与えた古代中国の兵法書「孫子」の「勢篇五」「虚实篇六」にも水や石の例が多く出てくる。(岩波文庫)

激水の疾くして石を漂わすに至る者は勢なり「せきかえった水が岩石までも押し流すほど激しい流れになるのが勢いである」(九六頁)

渾々沌々、形円にして敗るべからず也。(六九頁)

円石を千仞の山に転ずるが如くなる者は勢なり。「如転円石於千仞之山者勢也」

それ兵「軍」の形は水に象る。水の行は高きを避けて下きに趨く。兵の形は実を避けて虚を撃つ。水は地に因りて行を制し、兵は敵に因りて勝ち

を制す「因敵而制勝」。ゆえに兵に常勢「決まった勢い」なく、常形なし。能く敵によりて変化して「因敵変化」勝ちを取る者、これを神「神妙」と謂う。(八七頁)

孫子も戦の勢いを石と水に例えている。それでは石と水を元にした武蔵の極意は何であろうか。「五輪書」では「極意」は一箇所しか使われないが、代わりに「奇特」が使われている。

またいづれか極めんとたしかに思い取って朝鍛夕錬して、みがきおおせて後、独り自由を得、自ずから奇特を得、通力不思議有る所、これ兵として法をおこなう息(心意気)なり。(七八頁)

ここでは極意を得ようと「いづれか極めんと」朝鍛夕錬して「独り自由」「自ずから奇特」を得たと言っている。極意の意味で自ずからなる奇特という言い方がなされる場合は次の例もある。

道理を得ては道理を離れ、兵法の道に、おのれと自由ありて、おのれと奇特を得、時にあいてはひようしを知り、おのずから打ち、おのづからあたる、これみな空の道なり。(二五頁)

「極意」の意味で「自由」が、それも「独り自由」や「おのれと自由」という言い方がなされる。この場合「自由」とは「おのずから打ち」「おのずからあたる」という意味で「空」とも言い換えられている。おのずから打ちおのずから当たる。おのずからなる奇特を得るには自由が大事であると言っている。細川家本の「水の巻」の結論の箇所にある「惣体自由」の語の「自由」に「ヤハラカ」とルビが振られているが、「やわらか」は心に関してではなく、

身体を意味している。武蔵自身「惣体自由」、全身が自由、柔らかでなければならぬと言う。このルビは武蔵の極意理解にとつては重要な意味を持つ。

この法を学び得ては、一身にして二十三十の敵にも負くべき道にはあらず。先ず氣にて兵法をたえさず、直なる道を勤めては、手にてうち勝ち、目に見る人に勝ち、また鍛錬をもつて惣体自由なれば、身にても人に勝ち、又この道に馴れたる心なれば、心をもつて人に勝ち、この所に至りては、いかにとして人に負くる道あらんや。(三七頁)

兵法、太刀を取りて、人に勝つ所を覚ゆるは、先ず五つのおもてを以て五方の構えを知り、太刀の道を覚えては、惣体自由になり、心のきき出でて道の拍子を知り、おのれと太刀も手さえて、身も足も心のままにほどけたる時に随い、(七四頁)

武蔵にとつての兵法至極とは全身「惣体」が鍛錬によつて「やわらか」「自由」になることであつた。「やわらか」とは手も足も心のままにほど「解」けた状態、つまり自由になることである。武蔵にとつて兵法極意とは鍛錬によつて体をやわらかく自由にするることなのである。

「技がやすらかなる」、そのためには手足身が自由にならなければならぬ。一方、柳生も自由を極意といっている。

技はやすらかなるに、ならぬもたがわず、われもその事をしながら、われしらずして習いにならぬものなり。兵法の道、これにて心得べし。(二九頁)

様々の習いをつくして、習い稽古の修行、功つもりぬれば、手足身に所作はありて心になく、習いを離れて習いにたがわず、何事もするわざ自由なり。……習いを忘れ心を捨てきつて、一向に我も知らずしてかなう所が、道の至極なり。この一段は、習いより入りて習いなきにいたるものなり。(三〇、三一頁)

習いを尽くす目的は練習を重ねて手足身の所作が自由になつて、心の影響を受けないことであると言っている。そのためには心も自由にならなければならぬ。そうすれば、自分の心もどこにあるかも分らなくなるので、天の魔物も我が心の隙を見つけることは出来なくなる。修行がここまで至れば極意を得たことになる。

柳生新陰流においても極意は自由であり、この場合の自由は「手足身に所作はありて心になく、習いをはなれて習いにたがわず、何事もするわざ自由なり」とあるように、手足身の所作から生み出された技の自由なのである。

以上のように武蔵も柳生も極意は自由であると言っている。そしてその自由は「やわらか」とルビが振られているように、心の自由以上に身体の内なる自由である。我々は今日まで大きな誤解をしていた。剣を学ぶということは剣の技を学ぶことと思ひこんでいた。しかしこれまで見たようにそれは大きな間違いなのであり、その技がどんな身体操作に支えられているかという所まで入つていかなければ、剣を学んだとはいえないのである。『五輪書』で武蔵は技は五本で十分であると言っている。この指摘は重要である。剣は相手を切ればよいのであり、『五輪書』では太刀筋はその五本で十分であると言っているのである。しかしそれは身体の内なる自由を手に入れ、相手のどんな動きにも、方円の器に随う水のように対応出来る極意に至りつゝいた武蔵にこそ出来ることである。円明流は幸いに十一本の技が残っており、武蔵が実際の真剣勝負

をした時は円明流の時代である。実際の戦いでは二天一流よりも円明流の方が有効であると考えていたようであり、晩年熊本で二天一流を名乗ったあと名古屋に遣わした弟子の竹村与右衛門には円明流を名乗らせている。また名古屋時代の武蔵の強さがあまりに強烈だったためか、尾張の円明流と尾張柳生は江戸時代を通して武蔵が熊本で名乗るようになった二天一流をまったく問題としていない。

十一、武蔵の「下からの切り上げ」

武蔵が、円明流の極意である「やわらかな身体」を作るのに、どのような訓練方法を用いたかは、残念ながら伝わっていない。「五輪書」で型は五本で十分であると言っている。しかしそれだけで朝鍛夕錬の稽古・修行は出来ないのである。そこで武蔵以降、様々な型が作られた。しかしそれは武蔵が明確に否定している。さらには居合を追加している場合もある。五本の太刀型で十分であると言っている武蔵に、居合がないことは明白である。武蔵の円明流五本、二天一流の五本の太刀型を支えているのは、これまで見てきたように、やわらかな身体作りなのである。そこで著者の主催する円明流の稽古会では、太刀と身体を自由に回す稽古として「下からの切り上げ」を採用している。もともとは加藤館長が、新陰流の極意に限らず剣術の極意は下からの切り上げであるとして著者に身を以て教授していただいたものである。下から切り上げる太刀筋は新陰流では「九箇の太刀」の三番「十太刀」、「七太刀」の七本目「燕鷹」、極意の太刀と呼ばれる「奥の太刀」の六番目「神妙剣」にある。しかし腰を低く沈めて太刀を下から左右に廻して切り上げる稽古は、春風館でも柳生新陰流拔刀で稽古することはあっても、特にそれだけ取り出して稽古することはない。しかし身体操作を重視する私の稽古会では館長に見せていただいたこの稽古を、新陰流の基本稽古である「廻し

打ち」と同時に稽古の前に必ず行う訓練としている。これにより肩関節と股関節が自由になり、同時に身体がやわらかくなり、腰痛や肩のこりもなくなる、武術の稽古だけでなく、身体自身のためにも思いがけない効果をもたらす結果となっている。武蔵自身がどのような稽古方法を用いたかは不明であるが、「方円の器に随う」水を極意とする武蔵の流儀には、おそらくこのような身体をやわらかくする稽古方法があったに違いない。それであれば型は五本（円明流では十一本）で十分であるとは言わなかったはずである。相手がその前に立つと、思わず避けてしまうような敵の身が、水のように柔らかく、先を取って迫る勢いに相手は思わず崩れを見せてしまう。どんな相手の際にも方円の器に随う水のようにぶつかって倒してしまう——武蔵の極意はそこにある。この身体を得るための独自の稽古が、武蔵の「朝鍛夕錬」の内容であるに違いない。武蔵の自由な身体作りの秘密に迫る努力がなされなければならぬ。

図のように太刀を下からゆっくり八の字を描くように廻すが、太刀に身体がついて行くのではなく、腰の動きに太刀の動きが後からついてくることが重要である。腰の動きがとどまることなく八の字を描く事は至難の業である。しかし日々、稽古を積み重ねてやがて出来るようになる。そして次第に股関節と肩関節が柔らかくなり、太刀の動きと身体の動きが一致し、「太刀は身につれ」ということが実感できるようになる。



下からの切り上げ

SHITA KARA NO KIRIAGE

- ① Assume the Seigan position.
- ② Bring your sword straight up in front of your face.
- ③ Rotate your sword backwards over your left shoulder to your left side.
- ④ As you bring your left leg forward, cut upwards along your opponent's center line.
- ⑤ In a large motion, bring the sword up above your right shoulder while taking care not to change the angle of the sword's edge.
- ⑥ Rotate your sword backwards over your right shoulder to your right side.
- ⑦ As you bring your right leg forward, cut upwards along your opponent's center line.

* As you continue to advance forward and perform kiriage, you should try and create the character ∞ (Infinity) with your sword.

十二、新陰流の「廻し打ち」と自由稽古

武蔵「円明流」の極意が「水」であり、それを身に付ける鍛錬方法が「下からの切り上げ」であるのならば、柳生新陰流の極意「転」を身に付ける鍛錬方法は「廻し打ち」である。「廻し打ち」は段階を追って幾つかのやり方がある。

(一)、一人で行う基本稽古

これは次頁で紹介するが、この稽古で重要なのは、太刀を後ろに大きく廻す時、必ず雷刀に取り上げることである。次に斜めに打つ時、身体は四十五度に入り身になりながら、前に出す足は、足幅だけ外側に踏み出す。そして腕はしっかりと前に伸ばされなければならない。以上の点を注意して、動き自体は一瞬もとどまることなく滑らかに行う。

(二)、お互いに頭を打つ

使太刀 青岸に構える。

打太刀 雷刀から頭を打っていく。

使太刀 打太刀の頭への打ちを受けて「太刀は横にしないで、三十度ぐら

いの角度で、受けるというより当たっていく」太刀を大きく廻し

て雷刀に取り上げ、真直ぐに打太刀の頭を打つ。

打太刀 下がりながら使太刀の打ちを受け、太刀を廻して雷刀から使太刀の頭を打つ。

以上の動作を十回ほど繰り返し、決められた位置まで来たら、そのまま打太刀・使太刀反対になり、同じ動作を繰り返しながら行きつ戻りつする。

(三)、打太刀は常に真直ぐ頭を打つ。

打太刀 使太刀の頭を真直ぐ打って、一歩さがりながら太刀を雷刀に取り

上げる。

使太刀 打太刀の真直ぐな頭への打ちを、青岸に構えた太刀で受け、太刀を大きく後ろに廻し、左足を踏み込んで打太刀の右側頭部（実際は小手を付け雷刀に取り上げた付けた右手）を打つ。この場合も二と同じように、身体は四十五度入り身になり、足幅だけ右外側に踏み出す。

打太刀 下がりながら使太刀の頭を打つ。使太刀 打太刀の右小手を打つた太刀をそのまま上げて、打太刀の頭への打ちを受け、太刀を大きく後ろに廻して、右足を一歩踏み込んで打太刀の雷刀に取り上げられた左小手を打つ。この動作を繰り返し、道場の橋まで行ったら、今度はそのまま使太刀が下がりながら同じ動作を繰り返す。

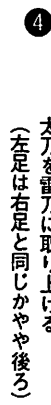
(四)、三の動作を、打太刀は頭ではなく足を打つことで行う。この場合の注意点は、打太刀、使太刀ともに。腰を十分に下げる（膝をえまます）こと、及び、使太刀は打太刀の小手を打った後、そのまま斜め真直ぐに切り下ろしてきた足への打ちを受けることである。初心のうちには太刀を横に廻して打ってしまいがちであるので注意を要する。

(五)、打太刀が頭か足を自由に打つことで、円明流と同じ試合に見立てた自由稽古が出来る。特にこの自由稽古で、柳生新陰流の極意「待つこと」と、是極一刀の一番の「相手の動きを見ること」の稽古が出来る。また以上の廻し打ちは八勢法に全て含まれているので、八勢法の準備としても応用技としても稽古できる。

○ただしこれは春風館関東支部での初心者稽古用として著者たちが考案したものである。



1 背岸に構える



2 太刀を雷刀に取り上げる
(左足は右足と同じかやや後ろ)



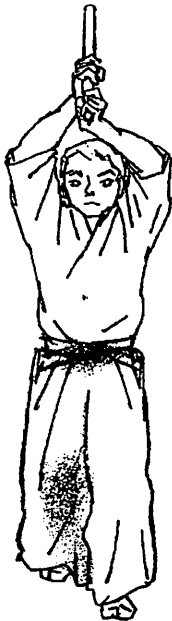
3 正面を切ってきた相手の太刀を受ける



4 両手は十分に伸び、右手は相手の中心に向けられる



5 正面を切ってきた相手の太刀を受ける



6 太刀を雷刀に取り上げる。
(右足は左足と同じかやや後ろ)



7 後ろの左足を前に進めながら
太刀を右肩脇より流し、

右足の踵に力をいれて左足を
相手の右足の外側に踏み出し、
左肩を入れて半身になり斜め
横から相手の右面を打つ

新陰流には本来、受け太刀はない。受けるのは身体
の形を作るための基本で、次の段階では撥ね
る。受けると、その瞬間に切られるので、相手の太
刀を撥ねると巧者はその力を利用して反撃する。し
かし撥ねると巧者はその力を利用して反撃する。本
来は当たった瞬間に太刀と身体を廻して相手を
切る(円の太刀)。

左足の踵に力をいれて右足を相手の左足
の外側に踏み出し、右肩を入れて半身に
なり斜め横から相手の左面を打つ



8 両手は十分に伸び、左手は相手の中心に向けられる

◎廻し打ちは一人稽古だけでなく二人で組んで行なう。
両手をパンパンと打ち合わせるような速度で打ち合い
ながら、前進後退を続ける。

廻し打ち

(MAWASHI UCHI)

- ① Assume the Seigan position.
- ② Bring your sword upwards and intercept your opponent's incoming frontal attack.
- ③ As you advance forward with your back left leg, rotate your sword over your right shoulder, diverting the path of your opponent's sword.
- ④ Continue the sword's rotation upwards into the Raitou position. (Your left leg can be in the same position beside your right leg or it can be slightly behind)
- ⑤ Forcefully utilizing the heel of your right foot, advance forward with your left leg so that your foot just lines up with the outer side of your opponent's right foot. As you advance, turn your left shoulder in while positioning half of your body inwards towards your opponent and, from the side and at a downward angle, strike the right side of your opponent's head.
* Both arms should be amply extended and your opponent's center line should be facing your right hand.
- ⑥ Bring your sword upwards and intercept your opponent's incoming frontal attack.
- ⑦ As you advance forward with your back right leg, rotate your sword over your left shoulder, diverting the path of your opponent's sword.
- ⑧ Continue the sword's rotation upwards into the Raitou position. (Your right leg can be in the same position beside your left leg or it can be slightly behind)
- ⑨ Forcefully utilizing the heel of your left foot, advance forward with your right leg so that your foot just lines up with the outer side of your opponent's left foot. As you advance, turn your right shoulder in while positioning half of your body inwards towards your opponent and, from the side and at a downward angle, strike the left side of your opponent's head.
* Both arms should be amply extended and your opponent's center line should be facing your left hand.

★

Shinkage Ryu essentially does not utilize blocking. Intercepting the cut in mawashiuchi is a fundamental movement meant to instill correct form in the practitioner's body, with the next step being sweeping the opponent's sword off its trajectory with the sword's rotation, and finally cutting the head. If one does actually block their opponent's frontal attack they will be immediately cut by their opponent; therefore one must sweep his opponent's sword, braking his posture, and cut him. However, when sweeping the opponent's attack, a skillful tactition will utilize the power exerted by this attack to mount his own counter attack. Essentially, one must instantaneously rotate both his sword and body and cut his opponent (円の太刀 En no Tachi).

☆☆

Mawashiuchi is not only a form of solo-training, but also a form of practice to be done with a partner. Advancing forward and retreating backwards, exchange strikes with your partner keeping a fast and continuous tempo.

十三、直刀と湾刀

私たちが転論の研究を始めてしばらくして、ある小学生向きの学習雑誌を発行している出版社から、古武道の特集、特に家康と柳生石舟斎の出会いの時、宗厳・宗矩親子が家康の前で行った無刀取りを取り上げたいので、監修をしてほしいという依頼があった。柳生流の無刀取りは秘伝であり春風館では公開していない。そこで、「直線の攻撃を円運動でさばく」という原理は同じである合気柔術の「太刀取り」を見せたところ、イラスト的にはそちらの方が描きやすいとのことであったので、イラストは太刀取りで代用していただいた。その際、幾つかの基本的な質問を受けた。その中で、目下研究中の転論の為にも必要と思われた質問事項が二つあった。

一、日本の古武術の動きの特徴「相手の動きにあわせて動く」とはどういうことですか。

二、なぜそのような武術が日本で生まれたのですか。

これらの質問に小学六年生にも分かるようにやさしく説明するために、今一度、武術の発生に遡って考えてみなければならぬ必要を感じた。以下は今のところ私たちの試論というべきものである。

一について

日本の古武道の動きの特徴は、刀剣の歴史と深くかかわっています。

○古代の最初の刀は青銅器製です。長くすると折れるので短かく、実戦ではなく主に祭礼用に用いたものです。

○やがて鉄器が作られるようになり、鉄は長くしても折れないので、実用として使われました。鉄製の武器を多く所有できなかった部族が他の部族を随えたとされます。古代から奈良時代にかけて、刀は、最初は、聖武天皇の

ものと最近判明した刀のように、まっすぐな「直刀」でした。直刀の遣い方は、攻撃は直線的な攻撃で、自分は打たれないように相手から遠い位置にいて、手を伸ばして相手を突くか、力任せに打ちかかったようです。この時代は技より腕力とスピードが勝敗の決め手でした。

○平安時代の中頃から鎌倉時代の初め、馬が陸奥（東国）から集められ、戦いは騎馬で戦われるようになりました。名譽を重んじ、馬に乗っての一对一の戦いが主なる戦いでした。現代でも「一騎打」といいう方が残っています。刀の形態は直刀から反りのある「湾刀」に変わりました。直刀で、馬上での戦いでは刀に馬のスピードが加わって、手にかかる衝撃が強すぎました。そこで衝撃を吸収させるために刀身を曲げた湾刀となったのです。この頃の手元から曲がった太刀が多く発見されています。

○室町時代から応仁の乱の乱世。戦場ではなく、京都などの街中での乱闘が繰り返されるようになりました。何時襲われるかも分らないので、常に身に離さず持てるあまり長くない太刀の有用性が増しました。馬上ではなく地上でも戦えるように、曲がりかたが穏やかになり現在の刀の原型が出来上がりました。太刀から刀への変遷です。

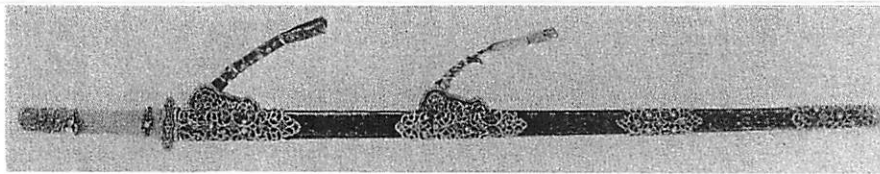
直刀から湾刀への変遷で刀の遣い方に対する自覚的意識が生まれました。まろく反った刀で敵を斬るには、手を伸ばすのではなく、腰を落として曲線的に刀を切り下ろした方が切りやすいことに気がつきました。刀も身体もまるく使う。これが刀の使い方の特徴となりました。そしてこの事が流派が生まれる基盤となったのです。

ただ最初は太刀は主に片手で使われていたことは、室町時代中期以前の太刀拵こしらへを見れば歴然としています。手で握る柄が中ほどから大きく棟側に反り返って、両手で持つことが出来ない構造になっています。しかし切り易く反っている余り長くない刀で敵を切るには、刀と一緒に自分の身体を相手に

近付けた方が切りやすいということに経験的に気がついたと思われます。刀と身体の一部化です。それには両手で持った方が一体化しやすい。こうして両手太刀の刀法が生み出されたのだと思われまます。この身体と太刀の一体化を巡っての様々な工夫が生み出され、それが戦国時代の流祖発生の基盤となったのだと思われます。刀が敵に向かっていく。その動きに身体がついていく。刀が身体の一部となって刀の働きと一致していく。このように動いていけば、敵のどのような変化にもついていくことも出来ます。片手太刀では、自分の身体は動かささないで、または相手から遠ざけ（逃げ）て相手を攻撃することは出来ます。しかし相手の早い動きに即座に対応することは出来ません。そこで身体の動きに合わせた太刀の遣い方が生まれたのです。簡単に言うと、刀に身体がついていくことで相手の動きに合わせて動くことが出来るようになったのです。「刀と身体の一部化」これが流派が生まれる基盤となる考え方であり、太刀は道具ではなくなり、身体の一部となったのです。

大和時代 平安時代中期 直刀
 平安時代中期～室町時代中期 湾刀（片手用）
 戦国時代 江戸時代 湾刀（両手用）

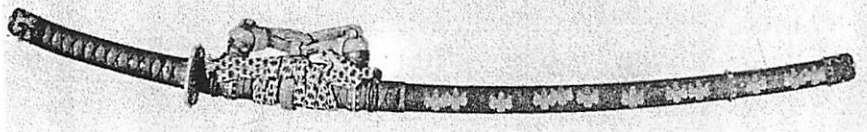
日本刀の変遷（『日本の甲冑武具辞典』柏書房参照）



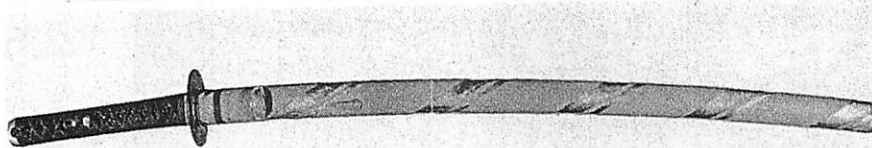
正倉院御物金銀細装大刀



春日大社所蔵毛抜形太刀国宝



日光東照宮所蔵・国宝金梨地桐紋散蒔絵絲卷太刀



東京国立博物館所蔵

古武術…自分から攻撃しないフシギな戦い方が なぜ日本に生まれたのか!?

古武術が敵を力でたおしたり、先制攻撃をしないのには理由があるといわれている。それは、日本の昔からの生活にヒントがあるんだ。古武術の不思議な戦い方がどうして生まれたのか、見てみよう!

古武術って何!?

剣術など武士が作った敵との戦い方がもとになって、江戸時代に生まれたのが古武術なんだ。みんなが知っている柔道や剣道、合気道などは古武術がもとになって明治時代になってから生まれたんだ。

奈良時代 鎌倉時代 戦国時代 明治時代
相撲 — 組討ち — 柔術 — 合気道 — 剣道

たたき
あい — 太刀討ち — 剣術
剣道

※武術の歴史はさまざまな説があり、本などによってちがうことがあります。本ほかにたくさんさんの武術がありますが、ここでは簡単に紹介しています。

伝説の武道家柳生宗厳の 新陰流「執巻勢」の構え!



- 歩くときはつま先を上げ、かかとを上げない。
- 刀をふりおろすときは、ひざを落として腰を垂直にしずめる。
- 打ちこむときは、手ではなく足腰をつかう。
- 手首ではなく、肩や腕をつかう。

一

日本は農業の歴史が長い! 湿った水田で独特の歩き方がうまれた! 日本では、田植えはおもに水田で行う。どろどろの地面は歩きづらく、同じほつ足の足をななめに出し進む歩き方ができた。これがまっすぐ相手を攻めず、ななめに相手をかわすワザになったという説があるよ。



二



日本はくわやすきをつかう歴史が長かった! 腰を落とし、かかどをつけて、バランスを大事にした! くわやすきで土を引く農作業は、腰を落とし力をいれヒザを曲げることが多い。古武術ではこの姿勢を基本にするんだ! 刀はつくのでなく、相手が攻めてきたとき引いて相手をきる。

三

曲がった刀で相手に回りこむワザが発達した! 平安時代より前の刀はまっすぐで、力まかせに攻撃する武器だった。でも馬に乗って戦うよつになると、力まかせな攻撃では馬のスピードが重なり自分にもダメージがでることがわかった。そこで、少しまがった刀で敵に近づき少ない力で相手をきるワザができた!



ヨーロッパは筋力をつけて攻撃する戦い方!



ヨーロッパなどでは狩りをする歴史が長かった。だから、ヨーロッパでは獲物を素早くつかまえる、スピードやパワーが重要と考えるようになったという説があるよ。

次は、古武術
トレーニング方法を
教えるぞ!



次のページへいそげ!

※ここで紹介したものにはさまざまな説があり、本などによってちがうことがあります。

二、「なぜそのような武術が日本で生まれたのですか。」について

東洋、特に日本は稲作民族です。日本の農業は田植えや草取り稲刈りなど長時間の農作業が必要とされます。そこで疲れない、腰を痛めない身体操作―膝を緩めて腰を垂直に落とす―が自然と生まれました。歩くのも踵をつけて重力にさからわないバランスを重視した歩き方となりました。鋤や鍬の使い方は体を丸く使い、手元に引く遣い方が疲れにくいということに自然と覚えました。このことは現代でも西洋ノコギリのように前に押し出さずに、引いて遣うことでも分ると思います。武道では昔から足は親指、手は小指と言われています。その意味するところは、足は親指側が、手は小指側が身体の重心を通る中心線に近いということです。重心または身体の中心線に力を集めることで無駄な力を使うことなく、力をいれることが出来ます。特に刀を抜く時や握る時は小指の力を使うことが絶対条件です。宮本武蔵が「上筋弱く、下筋強く」と云っていることはそのことを意味しています。

刀の使いかたも、鋤や鍬と全く同じで腰を落として身体を丸くして手元に引いて遣います。現代剣道の踵を上げて、手と竹刀を真直ぐ前に突き出し飛びこんで打つ身体操作が、いかに日本人の伝統的身体操作とかけ離れたものであるということが分ると思います。同時に、投げられまいとして腰をひく柔道も、腰で攻める日本人に合った身体操作とも捨て身を極意とする日本武術の心構えとも異なっています。

一方、西欧文明での戦闘方法を作り上げた民族は、狩猟民族であるゲルマン民族といわれます。狩猟では農耕と違って直線的に走って獲物を追いかけて、つま先だつて飛び込みます。それには農耕民族のバランス力ではなく瞬発力を必要とします。重力に逆らった筋力を鍛えることが大切となります。

それぞれの民族には自分に合った身体使いがあるのです。ヨーロッパ人

のように、より早くより高く地球の重力に逆らつて飛び上がるのではなく、日本人は、地球の重力と調和した身体操作を取り戻さなければ、民族の力がますます衰える結果となつてしまいます。簡単に言うると現代の日本人の身体は腰ぬけになつてしまつていのです。若い皆さんは伝統的日本人の身体を取り戻すには、どうしたらよいかということを考えてください。江戸時代の武士の武道を学ぶことは、そのためのヒントを与えてくれると思います。

十四、メコン川の新陰流

私たちは二〇一〇年の十一月二十四日から十二月一日までラオスとタイの日本大使館の招へいで、柳生新陰流および武蔵「円明流」・尾張貫流槍術の演武を行なつてきました。話の始まりは二〇〇九年十二月十日、東京国際フォーラムで開催された、皇太子をお招きしてのアジア七ヶ国と日本共同の古典伝統舞踊共演である「日本メコン二〇〇九年記念公演」を観た時、司会の方が、アジア稲作諸国と、同じ稲作民族である日本の舞踊に共通していることは、腰を落として大地を踏みしめる身体操作であると紹介されました。実際の各国の踊りもその言葉通りのものでした。後で私とその動きは日本の武士の動きと同じである、ぜひ今度はメコン川流域の稲作各国と日本の武術交流をして、稲作民族に合った東洋人のための体育を研究したいと提案しました。それがきっかけとなつてラオスとタイでの演武となつたのです。今後このような活動が広まり、稲作民族に合った新しい体育（身体育て）が出来ることを熱望しています。

ງານສະແດງສິນລະປະດາບຂອງສຳນັກຍະກົວຊິນຄະເງະ ແລະ ການລະຫຼິ້ນພື້ນເມືອງແບບເອໂດະໄດຄະງຸຣະ *Demonstration of swordsmanship and folk of Kagura*

●柳生新陰流 yagyushinkageryuu

ຕັ້ງແຕ່ສັດຕະວັດທີ 17 ຫາກາງສັດຕະວັດທີ 19, ຍີ່ປຸ່ນແມ່ນປະເທດທີ່ປົກຄອງໂດຍສະມຸໄລ. ທົວໜ້າຂອງສະມຸໄລເອີ້ນວ່າໂຊທຽນ. Yagyushinkageryu ແມ່ນໂຊທຽນ ແລະ ກຸ່ມຄົນຈຳນວນໜຶ່ງ ເທົ່ານັ້ນທີ່ສາມາດຮຽນໄດ້, ເຊິ່ງຖືວ່າເປັນສິນລະປະການຕໍ່ສູ້ລະດັບສູງທີ່ສຸດຂອງຍີ່ປຸ່ນ.

ຈຸດພິເສດຂອງYagyushinkageryu ນັ້ນບໍ່ແມ່ນການເລີ່ມບຸກໂຈມຕີກ່ອນ ແຕ່ແມ່ນເຕັກນິກການເອົາຊະນະ ເພື່ອຮັບມືເວລາທີ່ຖືກສັດຕູບຸກໂຈມຕີ. ເຊິ່ງແມ່ນໂດຍການເຄື່ອນໄຫວວົງມົນເພື່ອຮັບມືກັບການບຸກໂຈມຕີເປັນເສັ້ນ ຕົງຊື່.

- ກ່ອນອື່ນໝົດ ຂໍສະເໜີໃຫ້ເບິ່ງ「三学円の太刀 (さんがくえんのたち)」 ເຊິ່ງເປັນພື້ນຖານສຳຄັນຂອງYagyushinkageryu. ເພື່ອເປັນການເຝິກຊ້ອມ ຈະໃຊ້ໄມ້ໃສ່ທີ່ຕັດ ແລະ ຄຸມດ້ວຍໜັງງົວໃນການສາທິດ.
- ຜູ້ທີ່ຈະສາທິດ Yagyushinkageryuທີ່ໃຊ້ດາບໄມ້ໃສ່ແມ່ນ ທ່ານ 赤羽根龍夫 ເຊິ່ງຮັບໜ້າທີ່ເປັນ ຜູ້ບຸກໂຈມຕີ ແລະ ທ່ານ 赤羽根大介 ເຊິ່ງເປັນລູກຊາຍຈະຮັບໜ້າທີ່ເປັນຮັບມືເພື່ອເອົາຊະນະການບຸກໂຈມຕີ.
- ລາຍການທີ 2 ແມ່ນ ຈະສະເໜີການຊ້ອມ 8 ທ່າ ໃນການກະກຽມຮ່າງກາຍ. ທ່ານນາງ 若尾洋子 ເຊິ່ງແມ່ນ top ຂອງຄະນະນັກສະແດງຍິງ.
- ລາຍການທີ 3 ແມ່ນການສາທິດການຕໍ່ສູ້ໃຊ້ດາບ ແລະ ງ້າວ. ງ້າວ ແມ່ນ ອາວຸດທີ່ໃຊ້ ດາບສັນມັດຢູ່ປາຍທ່ອນໄມ້ຍາວ, ເຊິ່ງສະແດງໃຫ້ເຫັນເຖິງພະລະກຳລັງຢ່າງຫຼວງຫຼາຍໃນການຕໍ່ສູ້.
- ລາຍການທີ 4 ແມ່ນຈະນຳສະເໜີເຕັກນິກການຕໍ່ສູ້ທີ່ໃຊ້ຫອກ. ຫອກຈະມີກົນໄກພິເສດຢູ່ແມ່ນການກຳດ້າມ ໂດຍການເລື່ອນຫອກຈາກທາງໃນອອກມາ. ສະນັ້ນ ຈະເຮັດໃຫ້ສາມາດແທງຄູ່ຕໍ່ສູ້ໄດ້ຢ່າງໄວວາ.
- ລາຍການທີ 5 ແມ່ນການສາທິດການຕໍ່ສູ້ໂດຍບໍ່ໃຊ້ດາບ, ໃຊ້ມືເປົ່າຮັບດາບຂອງສັດຕູ. ເຕັກນິກນີ້ແມ່ນທີ່ມາຂອງເຕັກນິກຢູໂດ ແລະ ອາອິກິໂດ. ຈຸດພິເສດຂອງເຕັກນິກນີ້ບໍ່ແມ່ນສະບັດຖິ້ມ ແຕ່ແມ່ນການຄວບຄຸມເຮັດໃຫ້ສັດຕູເຄື່ອນໄຫວຍໍ່ໄດ້.
- ຕໍ່ມາແມ່ນການສາທິດ 二刀流 ເຊິ່ງກໍຖືວ່າເປັນຄູ່ແຂ່ງຂອງshinkageryu. ສາທິດໂດຍທ່ານ 宮本武蔵. ທ່ານ 宮本武蔵 ແມ່ນຜູ້ທີ່ມີຄວາມຊຽງຊານເລື່ອງດາບ ທີ່ສຸດຜູ້ໜຶ່ງ ແລະ ທີ່ເປັນທີ່ຍອມຮັບໃນສັງຄົມຂອງສະມຸໄລຍີ່ປຸ່ນ. ເຊິ່ງເພິ່ນໄດ້ຂຽນປື້ມ「五輪の書」ແລະຖືກແປຢູ່ 17 ປະເທດທົ່ວໂລກ.
- ສຸດທ້າຍແມ່ນການສະແດງえんぴ . えんぴ ໝາຍຄວາມເຖິງ ນິກນາງແອ່ນໂບຍບິນ. ເຊິ່ງໃນYagyushinkageryuແມ່ນເຕັກນິກທີ່ມີຄວາມໄວທີ່ສຸດ ແລະ ຄ່ອງແຄ້ວ.

ຂໍຂອບໃຈ

ラオスでの演武

柳生新陰流とは：17世紀から19世紀の半ばまで日本は侍が国治めていました。侍のトップを将軍と言います。柳生新陰流は将軍とその一族しか学べない、日本で最も位の高い武術です。

柳生新陰流の特徴は、自分から先に攻撃を仕掛けず、相手が攻撃を仕掛けてきた時に、必ず相手に勝つ技であることです。方法としては相手の直線的な攻撃に円運動で対応します、

- 一番目に柳生新陰流の基礎でもあり極意の技である三学円の太刀（さんがくえんのたち）をご覧にいます。練習用にはこの竹を割ったものに牛皮をかぶせたものを使います。
- 今竹刀をお見せした人が柳生新陰流の指導者（赤羽根龍夫）で、先に打っていく役（打ち太刀）を受け持ちます。その攻撃を受けて柳生新陰流で勝つ役（使太刀）は息子さん（赤羽根大介）です。
- 二番目に身体作りのために練習用の8つの型演じます。若尾洋子さんは女性のトップの指導者です。
- 三番目は薙刀と太刀で戦います。なぎなたは長い棒の先に短い刀を付けた物で、実際の戦いには大きな力を発揮します。
- 四番目に槍と槍との戦いの技をお見せします。この槍には特別な仕掛けがあり、前の事に管を握って、その中を槍を滑らせませす。突くときにスピードが出て、相手は避けることが出来ません。
- 五番目は無刀取り、素手で刀で打ちかかってくる敵を抑えます。柔道や合気道のもとになったものです。投げないで押さえつけて動けなくすることが特徴です。
- 次は柳生新陰流の最大のライバルであった、宮本武蔵の二刀流を行ないます。宮本武蔵は日本の侍の中では世界で一番よく知られている剣の達人です。彼の書いた『五輪書』は17カ国語に翻訳されています。
- フィナーレは燕飛（えんぴ）の型です。えんぴとはつばめが飛ぶという意味です。柳生新陰流の中では一番早い、豪快な技です。
- ありがとうございます。

ラオス・日本武道センター



ວັນສຸກ ທີ 26 ພະຈິກ 2010
ເວລາ 19:00 - 21:00
ທີ່ສູນກິລາບູໂດລາວ-ຍີ່ປຸ່ນ

Friday 26 November 2010
at 19:00 - 21:00
Lao-Japan Budo Center

Japan View

ศิลปะการต่อสู้แบบญี่ปุ่น ของสำนักยะทิวชินคะเมะ

Japanese Martial Arts from the Yagyū Shinkage School



ศิลปะการต่อสู้ของชาวญี่ปุ่นมีหลากหลายรูปแบบ แต่การต่อสู้ของสำนักยะทิวชินคะเมะ มีลักษณะเฉพาะที่โดดเด่นคือเป็นศิลปะการต่อสู้ที่เรียนได้เฉพาะชนชั้นสูงระดับกษัตริย์ หรือเชื้อสายของกษัตริย์เท่านั้น

และไม่ได้เป็นเพียงแค่การต่อสู้ แต่ยังเป็นกลยุทธ์หนึ่งในการปกครองประเทศและการเคลื่อนกำลังทหารเมื่อเวลาออกรบ คือจะไม่เป็นฝ่ายจู่โจมแต่จะเน้นการตั้งรับและรอให้ฝ่ายตรงข้ามจู่โจมเข้าหาเพื่อใช้จังหวะนี้สังเกตร่างของคู่ต่อสู้ เมื่อพบจุดอ่อนก็จะโต้กลับทันที โดยไม่มุ่งหมายจะเอาชีวิต เพียงแค่ให้รับบาดเจ็บบริเวณมือ (ให้อาวุธที่ใช้ป้องกันตัวหลุดจากมือ) เพื่อให้คู่ต่อสู้เป็นฝ่ายที่หมดแรงและถอดใจไม่สู้ต่อ

โดยทั่วไปแล้ว ส่วนใหญ่คนมักจะรู้จักการต่อสู้ที่เรียกว่าเคนได้มากกว่า ซึ่งเคนได้นั้นจะมีลักษณะเป็นการกระโจนเข้าไปตีคู่ต่อสู้ แต่ศิลปะการฟันดาบของญี่ปุ่นแบบดั้งเดิมนั้นไม่ใช้การกระโจน และไม่อยู่ในตำแหน่งที่ตรงตัวกับคู่ต่อสู้เหมือนกับเคนได แต่จะจู่โจมโดยเคลื่อนตัวไปรอบๆ ให้คู่ต่อสู้เป็นศูนย์กลางเพื่อจุดจังหวะแล้วลงมือ

タイの雑誌「コンパス」に掲載された記事

日本には多様な武道がある。そして柳生新陰流の技もその内の一つである。しかし昔は武道の内でも柳生新陰流は王室（日本では江戸時代の将軍）だけが学ぶことができた。

さらに柳生新陰流は、敵によって企てられた攻撃を防衛することに焦点を当てることで、単なる武道といったものではなく、治世や戦争での効果的な戦略と見なされた。敵のあらゆる動きが注意深く見守られ、弱点が現れるや

いなや、その弱点が攻撃される。しかしながら柳生新陰流の戦いは、敵の死を最終目的とはしていない。目的は武器を持った手を傷つけることで、敵の抵抗力とエネルギーを弱め、敵に戦うことを諦めさせることである。一般には日本の武道としては、剣道のほうがよく知られている。剣道では二人の人間がお互いに飛び上がり、剣を前に突き出すことで戦う。しかし本来の日本の剣術では、飛び上がることはない。戦うもの同士は、剣道のように敵に向かって平行には立たないで、敵が真直ぐに攻撃してくるのを待って、敵の周りを廻る。

ทั้งเคนโด้และการฟันดาบของชาติตะวันตกมีลักษณะที่คล้ายกันคือ อยู่ห่างจากฝ่ายตรงข้ามให้มากที่สุดเพื่อป้องกันตัวแล้วโจมตีคู่ต่อสู้โดยการทอดแขน แต่ศิลปะการต่อสู้แบบยิวจินคะจะเน้นจะเข้าประชิดเพื่อย่อยให้คู่ต่อสู้เป็นฝ่ายรุกก่อน ซึ่งเป็นจังหวะที่เราจะได้เปรียบในการโต้กลับ

ถึงแม้ศิลปะการต่อสู้ไม่ได้ถือว่าเป็นกีฬาและคงจะไม่มีการจัดแข่งขันในกีฬาโอลิมปิก แต่ด้วยท่าทางการเคลื่อนไหวของการต่อสู้แบบยิวจินคะจะมีความสอดคล้องกับท่วงท่าของการทำนาซึ่งเป็นรากเหง้าของประเทศในแถบเอเชีย จึงอยากส่งเสริมให้มีการถ่ายทอดศิลปะการต่อสู้แบบยิวจินคะงะ ในรูปแบบของกิจกรรมแลกเปลี่ยนทางวัฒนธรรมในภูมิภาคนี้ ซึ่งใช้เป็นการออกกำลังกายที่สร้างเสริมสุขภาพได้อีกด้วย ■

Japan has a variety of martial arts, and the art practiced at the Yagyū Shinkage School is one of them. However, in the past this form of martial art was only taught to members of the royal family.

Furthermore, it is not just a martial art, but considered an effective strategy for governing the country and fighting in wars, as it focuses on defending the offensive moves offered by an opponent. Every move of the opponent is watched, and as soon as a weakness appears, he will be attacked where it exists. However, a fight in this martial art form does not end in death, the aim is to injure the hand that holds the weapon, and reduce the strength and energy of the opponent; forcing him to give up.

People in general are most familiar with kendo, which is a form of Japanese martial art in which two people fight by jumping at each other and drawing a sword. However, there was no jumping in the original Japanese sword fighting art, and the fighter would not stand in parallel to his opponent like in kendo, but would move around his opponent, waiting for the right moment to attack.

Kendo and western sword fighting arts have one element in common; the fighter will try to maintain as much distance from his opponent as possible, then attack by drawing the sword. However, in this Japanese martial art, the fighter stands at a distance at which his opponent can easily approach him, then takes the opportunity to attack once his opponent has made his move.

Essentially, this martial art is not considered a sport, and is not in the Olympic Games, but Asian people like to use similar body movements, so this type of martial art has great potential as a form of exercise for people in Asia, as well as helping to encourage cultural exchange. ■

剣道と西洋の剣術（フェンシング）は一般に同じ要素を持っている。戦う者は出来るだけ敵から距離を取ってしようとする。それから剣を前に突き出すことで攻撃する。しかしながら、柳生新陰流においては戦う者は彼の敵がたやすく彼に接近出来る位置に立ち、彼の敵が動くやいなや敵を攻撃する機会を捉える。

本質的に柳生新陰流はスポーツとはみなされず、オリンピック種目にも入っていない。しかしアジアの人々は柳生新陰流と同じような身体の動きをする。したがって、柳生新陰流はアジアの人々の運動の様式のみならず、同時に文化的な変革を促す可能性を持っている。



ラオス日本国大使館 横田順子特命全権大使による大使公邸での大使主催の晩餐会。横田大使は昨年までタイの総領事だった。横田大使の御尽力により、今回のラオス、タイでの柳生新陰流の演武会が開催された。

十五、巖周伝新陰流の四原則

最後に、巖周伝新陰流の伝統を将来にわたって守り抜くために、館長のお許しを得て「巖周伝新陰流の四原則」を掲げておきたい。

- 一、出るときも下がる時も常に踵を踏む。
- 二、龍の口を広げる。
- 三、膝を緩めて腰を少し落とす。
- 四、腰を反らさない。

一について

武蔵は「五輪書」で、

足の運びようのこと、つま先を少し浮かせて踵を強く踏むべし。足づかいは常に歩むがごとし

と言ひ、柳生宗矩は「兵法家伝書」で、

歩みのこと、いつものごとくすると歩むがよきなり。

また柳生兵庫助は「柳生巖長伝述」(私家版)によると

兵庫助開祖は、「つまだつて飛び込む様なる」打ち込みをきびしく禁習し、足の爪先を浮(う)けて、足心―土ふまずをもって歩む好習を示している。

神戸金七は春風巻館道場で、

この流儀は踵が上がったら絶対駄目だ。踵があがらない稽古をしなさい。

と常に指導し、しかし踵があがらないだけでは駄目で、同時につま先をあ

げなければ流儀の足とはならないと、「柳生の芸能」には自筆の足の指の絵を載せている。また加藤現館長は、

退がるときも出るときも踵をあげないように。とくに切り込むときは踵からでる。切り込むときにつま先から出て踵を下ろしてから出ては遅い。どんな時も踵からでる。

と厳しく指導され、技がどんなに出来ても踵を上げていたら新陰流とは言えない、と話されている。

二について、

太刀や袋竹刀・木刀を握る時、人指し指と親指の間をすぼめないで丸く握る。この丸くなった部分を「龍の口」と呼ぶ。神戸金七は「近頃の人は太刀を持つ術すら知らぬ。太刀の持ち方が駄目だったら、この流儀は駄目だよ」と常々話されたそうである。柳生兵庫助の「始終不捨書」に「刀を遣う事、肩腕、惣身より」とあるが、踵を踏むことで生まれる足腰の力を、手に持った太刀に伝えるためには「龍の口」を広げて太刀を持たないと、薬指と小指の下方の掌の下部分に足腰の力が伝わらず、太刀に力が届かないことになる。それでは剣道のように打つこと、居合のように切ることは出来ても戦うことは出来ない。武道では一般に「足は親指、手は小指」と言われているように、手の小指側は特に重要である。武蔵は「三十五ヶ条」で手の「上筋弱く、下筋強く」と指摘している。最近では長い刀を使う為、刀が抜きやすいように人差し指と親指で太刀を握り、指導もしている場合があるが、まさに神戸先生が言われる「最近の人は太刀を持つ術すら知らぬ」ということになってしまっている。新陰流は「戦いの法」であるという原点を忘れないようにしなければならない。

三について、

十二章で指摘したように、日本の武道は稲作民族の特徴である、膝を落とし、腰を僅かに垂直に沈める身体操作を基本としている。鎧を着た時代には腰を大きく沈めていたが、江戸時代になって戦がなくなり、鎧を着なくなつたので、腰の沈め方が軽くなつた。それを兵庫助が「直立つたる身」と呼んだのであつて、膝を真直ぐ伸ばしてしまつたら膝にロックをかけた状態になり、踵の力が腰に伝わらなくなり、腰ぬけの状態になつてしまふ。腰を沈めることが新陰流に限らず日本の伝統武術の特徴である。

四について

以上、一から三について著者達は『柳生新陰流を学ぶ』(二〇〇七年)『武蔵「円明流」を学ぶ』で詳説した。今回特に強調したいのは四である。腰を反らすと身体全体にロックをかけた状態になり、剣道のように真直ぐ飛び込むことは出来るが、柳生新陰流のまろばし転や円明流の「水は方円の器に随う」というようなあらゆる方向への柔軟な動きが出来なくなる。これは剣だけでなく抜刀や槍の場合にも絶対守らなければいけない基本となる身体操作である。技がいくら出来ても、その技を支えている身体操作が正しくなければ、伝統武道を正しく学んでいゝとは言えない。伝統武道を学ぶということは、技と身体を身につけることである。我々は江戸武士の刀法および身体操作を伝える厳周伝新陰流を正しく守り伝えていくことを使命としなければならぬ。そのために、以上の四原則を「厳周伝新陰流四原則」として鍛錬を続けていきたい。最後に春風館道場に掲げてある神戸金七先生の言葉をここにも掲げて自戒の言葉としたい。

自然のことわりにあいかなわば

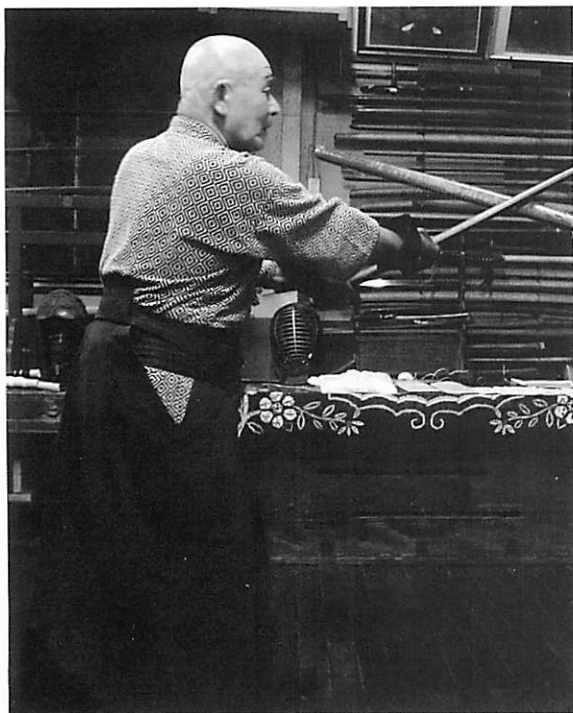
自分も教えをうけ

人をも教えることができる

加藤館長の手の内と腰



柳生厳周が生涯使用した指懸。「新陰流の手の内を教えるんだつたらこれを見せよ」と言つて神戸金七が加藤館長に遺したものである。これを手に着けると自然と「流儀の手」になる



一刀両段

十六、対二刀勢法

『刀法録』には武威の二刀流に勝つ柳生新陰流の勢法が載せられている。勢法そのものは春風館道場に伝えられていないので、今回著者たちは神戸金七『柳生の芸能』をもとに再現してみた。くねり打ちや下からの切り上げ、九箇の太刀の『村雲』の秘太刀ともいえる太刀などを使い、五本の型を一つの「続け使い」にまとめ春風館の加藤館長にお見せした所、「変化」として稽古してよいというお許しを得た。七回ほど激しく打ち合う技なので、「勇」を養う稽古として伝えていきたい。

使太刀 雷刀

打太刀 太刀は撥草、小刀は切先を打太刀の顔に付ける。①

使太刀 打太刀の小刀を、斜め右からくねり打ちに浅く探打する②

打太刀 空いた使太刀の左肩を太刀で打っていく。

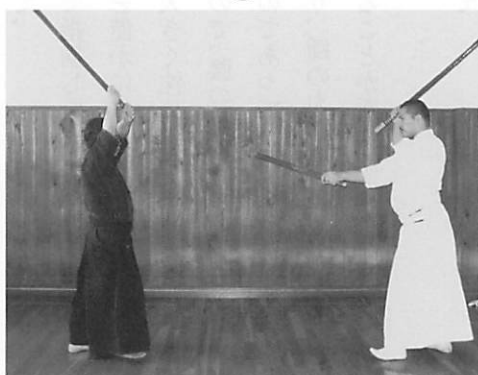
使太刀 足を踏み変えて順に相架け止める。

打太刀 空いた右肩を打っていく。

使太刀 打太刀の左に轉身して、打太刀の小刀を右に撥ね上げ、順に打太

対二刀勢法

①



②



③



④



刀の左側頭を順に打つ。

打太刀 左腕を左側頭部に上げ、使太刀の打ち小手で防ぐ。「続け遣いのため小手を付ける」続けて太刀で使太刀の左足を打っていく。

使太刀 足への打ちを順に相架け止め、打太刀の右に轉身して、打太刀の右側頭部を逆に廻し打つ。

打太刀 右手を右側頭部に上げ、使太刀の打ちを小手で防ぐ。

使太刀 大きく左斜め後ろに退いて太刀先を左にねかせて拳を見せる。

〔迎え、「九箇の太刀」の「村雲」の如くである〕③

打太刀 太刀で使太刀の拳を真直ぐ上から打っていく。

使太刀 打太刀の太刀を右に撥ね、右足通りの極意の打ちで右手を打つ。

同時に左斜め後ろに大きく退がり太刀を雷刀に振りあげる。

打太刀 両刀を円曲に構え、使太刀を攻める。

使太刀 円曲の交上を砕くように打ち、そのまま太刀を下に沈める。

打太刀 太刀で使太刀の顔を突いて行く。

使太刀 打太刀の太刀を刃を上にして撥ねあげ④、打太刀の右に轉身して右側頭部又は右胴を斬る。